

九州大学 経済学部 同窓会報 第58号

九州大学経済学部同窓会
事務局 〒812-8581
福岡市東区箱崎6-19-1
九州大学経済学部内
TEL 092-642-2442 FAX 092-642-2348
mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替 01750-6-21743

目次 Contents

平成27年度行事予定(総会のご案内) / 1	書評:中川スミ著(青柳和身+森岡孝二編)『資本主義と女性労働』 原 伸子(昭和52年博士入) / 16
研究院長就任のご挨拶 磯谷 明德 / 2	リレー随想
研究院長退任のご挨拶 山本 健兒 / 3	経済学部で学んだこと 福岡 道生(昭和30年卒) / 17
事務局長挨拶 藤井 美男 / 5	半生を振り返って 森 重厚(昭和34年卒) / 19
支部だより	福岡に住んで45年 箱崎 公彦(昭和51年卒) / 21
東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 5	木下先生への感謝の気持ち 松野下正秀(昭和53年卒) / 22
関西支部 副支部長 太田 光一(昭和46年卒) / 6	九大入学から卒業そして同窓会
福岡支部 事務局長 平井 彰(昭和55年卒) / 7	川原 晃(昭和54年卒) / 23
大分県支部 事務局長 油布 正春(昭和49年卒) / 8	グローバル事業の最前線より 奥野 恒久(昭和58年卒) / 26
追悼	Music in my Life 宮崎 誠二(昭和63年卒) / 27
故 伊東 弘文先生	人間万事塞翁が馬 久間 敬介(平成6年卒) / 28
さようなら、伊東先生 中村 良広(昭和49年博士入) / 8	九大生から書家へ 山園 和彦(平成16年卒) / 30
伊東先生の魂の旅立ちを祝おう	27歳からの学生生活 山口 裕之(平成25年卒) / 31
赤石 孝次(昭和59年博士入) / 10	人物往来 ~退官
故 浜砂 敬郎先生	九州大学の思い出 佐伯 親良 / 32
追悼 浜砂敬郎君の急逝を悼む	お別れのことば 中村 周史 / 33
大屋 祐雪(昭和26年卒) / 11	同窓会会則 / 34
ごあいさつ 世話人代表 近 昭夫 / 12	同窓会歴代会長 / 36
浜砂先生さようならー敬愛する兄弟子へ	同窓会費納入のお願い / 36
嶋田 正明(昭和54年卒) / 12	
同窓生健筆模様	
中川信義著『世界価値論研究序説』(御茶の水書房、2014年)を読む	
鳴瀬 成洋(昭和52年卒・昭和54年博士入) / 14	

平成27年度行事予定(総会のご案内)

平成27年度の全国・各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内いたします。

平成27年度 福岡支部総会
 日時 平成27年6月12日(金) 18時~
 場所 ホテルオークラ福岡
 (福岡市博多区下川端3-2
 TEL (092) 262-1111)
 講話 貫同窓会長(九州電力(株)会長)
 演題 「電気事業をめぐる課題」
 <お問い合わせ先> 福岡支部事務局 平井 彰
 一般社団法人九州経済連合会内
 TEL (092) 761-4261
 E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

平成27年度 広島地区九大法・経同窓会総会
 日時 平成27年11月開催予定
 場所 未定

平成28年 全国・関西支部合同総会
 日時 平成28年2月20日(土) 15時~
 場所 阪急ターミナルスクエア17(阪急17番街)
 <お問い合わせ先> 関西支部事務局 中野 光男
 富士精版印刷株式会社管理本部 気付
 TEL (06) 6394-1182
 E-mail m-nakano@fujiseihan.co.jp

平成27年度 東京支部総会
 日時 平成27年7月7日(火) 18時~20時50分
 場所 学士会館 210号室
 (東京都千代田区神田錦町3-28
 TEL (03) 3292-5936)
 <お問い合わせ先> 東京支部事務局 吉元 利行
 株式会社オリエント総合研究所
 TEL (03) 5877-5590 (ダイヤルイン)
 FAX (03) 5877-5859
 E-mail toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp(会社)
 t29yoshimoto@aol.com(自宅)

研究院長就任のご挨拶



経済学研究院長
磯谷 明德氏

2015年1月の教授会において、4年間にわたり経済学研究院・学府・学部の運営の舵取りをなされてきた山本健児研究院長の後任として、2015年

4月からの2年間、研究院・学府・学部の運営を担うことが決定されました。山本先生の前任者であった川波洋一先生が、2007年度から2010年度までの4年間、そして山本先生が2011年度から2014年度までの4年間、計8年間にわたりお二人の先生は多くの課題を適切に処理されてきましたが、前任のお二人の先生方と同様の管理運営を行うことができるかどうか、全くのところ心許ないというのが正直な気持ちです。1991年10月に経済学部に着任してから20年余りが経ち、この長きにわたってお世話になってきた経済学部へのわずかばかりの恩返しのため、微力ではありますが、経済学研究院・学府・学部の将来に向けての貢献をすることができればと思っています。2月の教授会においては、副部長をはじめとして、4部門の部門長も決定いたしました。新しい執行部の先生方とともに、2004年の国立大学法人化から10年を経過して、矢継ぎ早に課されている多くの難題に取り組んでいくつもりです。現在の大学を外からの客観的な眼で見られる同窓会の皆様のご協力を賜りますとともに、ご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願い申し上げます。

現在、本研究院・学府・学部に課せられている課題は、大きく2つあります。第1は、一昨秋に公表された「国立大学改革プラン」に示された課題への対応であり、第2は、「スーパーグローバル大学」タイプA・トップ型13校に採択されたことに伴う新たな教育プログラムの立ち上げという課題です。

まず前者の課題については、2004年の国立大学法人化から10年が経過し、2015年度は、法人化の長所を生かした改革の本格化の期間と位置づけられた「第2期中期目標・中期計画期間」の最終年度にあたります。したがって、2015年度には、2016年度からの「第3期中期目標・中期計画」の策定が行われ

ます。この第3期中期目標・中期計画期間では、「持続的な『競争力』を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学へ」という目標が掲げられ、そのためのプランとしての「国立大学改革プラン」(2013年11月)と各教育研究分野におけるミッションの再定義がすでに公表されています。この「国立大学改革プラン」での教育研究の項目については、第1に、社会の変化に対応できる教育研究組織づくり、第2に、国際水準の教育研究の展開と積極的な留学生支援という2つが挙げられています。ここで言う社会の変化とは、急速に進展する少子高齢化や世界的規模で急速に進むグローバル化という外的環境の変化を指します。大学における教育・研究のあり方が、社会の変化や時代の趨勢に対して柔軟に対応していかなければならないということについてはもちろん首肯できますし、また高度経済成長期のような「量産型」の経済学教育が一定の限界に達しつつあるという事実も認めることができます。しかし、個人的には、大学という教育・研究の現場に市場の原理が過度に適用され、「稼ぐ力」や「稼げる大卒」ということだけが主張されるような状況には、いささか疑問を感じざるをえません。そして、なによりもそこには、「学生への視点」が欠けているように思えてなりません。学生たちは実に多様な潜在能力を持って入学してきます。そうした各自の潜在能力を開花させる場が大学でなければならないはずですが、学生たちが、それぞれの専門について深い知識を持つ個々の教員たちの考え方に接するにより、世界にある諸問題を知り、自分の能力が何に向いているのかを理解する、それを学生たちの自らの力でできることが重要ですが、その手助けをするのが教員たちであると考えます。こうした学生と教員の共働あるいは共同の学習こそが教育・研究の現場での大きな魅力ではないかと思えます。

経済学部では、2006年度からの新カリキュラムの移行に伴い、1年生から4年生まで一貫した小人数教育(ゼミナール)の実施とそれと連動した形での学部生に対するきめ細かい修学指導・支援の体制を実施し、それを9年間にわたって積み上げてきたという実績を持っています。この修学指導・支援体制を開始した当初は、落ちこぼれそうな学生、落ちこぼれてしまった学生のケアを目的にしていたのですが、これからは、意欲のある学生たちの能力を向上させ、

持っている関心をさらに引きのばしてやるというように、その体制を一段と発展させるべきもの(「セーフティーネット」型から「トランポリン」型へ)と考えています。また外国人留学生の急増に伴う経済学府・学部内での留学生の支援についても、2009年度からの計3回にわたる「教育の質向上支援プログラム」の採択による学内補助によって、留学生の日本での生活の定着支援と修学支援を行う「留学生支援室(SQI)」と留学生(同時に日本人学生)に対する学習支援を行う「修学相談支援室(SQA)」を開設して、留学生支援のインフラを整備し、その機能強化に努めてきたという実績を持っています。

今後、経済学研究院・学府・学部において進めて行かねばならないのは、グローバル人材育成のための積極的な取り組みです。これは、2つの課題うちの後者の課題に関わります。スーパーグローバル大学創成支援事業における九州大学の構想における目玉の1つは、「国際教養学部(仮称)」の新設です。昨年には、定員105人規模の「国際教養学部(仮称)」の概要が決まり、それに伴い各学部(医・歯学部を除く)にはグローバル人材の育成を目指す学部国際コースを設置することが決定されました。経済学部が立ち上げる国際コースである「経済学部グローバル・ディプロマプログラム(GproE)」は、2018年度にスタートします。このプログラムで育成を目指

研究院長退任のご挨拶



前経済学研究院長
山本 健児氏

2015年3月末をもって経済学部長・学府長・研究院長を退任しました。この間、同窓会の皆様と懇談する機会を何度も持ち、また九州大学や経済

学部の現状報告の機会をいただいたことも何度かあり、そのつど九州大学のこと、経済学部のこと、同窓会のことなどを学ぶことができました。たいへん有り難いことであったと思っております。厚く御礼申し上げます。

実はこの原稿を書いているのは3月初めです。し

すグローバル人材とは、「高度な経済・経営に対する専門的知識を身につけ、それらを内外の言語で自在に応用し実践に移すことのできる人材」です。したがって、このプログラム生として選抜された学部生に対しては、これまでよりも一段と高い専門性と英語等でのコミュニケーション能力、プレゼン・ディスカッション能力などの付与を企画しています。しかし、これは、既存のカリキュラム体系の抜本的な見直しや単なる外国語能力の育成だけへの特化を行うおうとするものではありません。むしろ、既存のカリキュラム体系の下でこれまで培ってきた独自の専門教育を基礎として、外国語による経済経営専門科目、短期の語学留学、内外混在小人数演習や集中講義形式で実施されるグローバル・ウィーク科目などを、各学年次のそれぞれの学期に適切に配置することによって、目標とするグローバル人材の効果的な育成が可能であると考えています。

以上のように、現在の箱崎キャンパスから伊都キャンパスへの移転の完了が予定されている2018年頃までの期間は、経済学研究院・学府・学部にとっても大きな変革期になるだろうと予想しています。バブル崩壊後の1990年代以降、民間企業や公的機関において、すでに数多くの荒波を経験してこられた同窓会の皆様には、多くの助言と協力を賜りますことを切にお願いする次第です。

したがって退任まであと3週間余あり、重要な仕事はまだいくつも残っているので、退任という気分に入ることができないでいます。と申しますのも、後期日程入学試験があと数日後にありますし、国立大学法人としての第2期中期目標中期計画期間の最終年度を控えて、これの総括準備と、2016年度からの6年間のための第3期中期目標中期計画の準備とが始まっているからです。これらは、2013年11月に文部科学省が公表した「国立大学改革プラン」に沿って進行しつつあります。このプランは、全国の国立大学の機能を強化するためのものであるとうたわれてはいますが、その要点は、国立大学法人を機能という点で次の3つに分けようとするものです。

1. 世界最高の教育研究の展開拠点。
2. 全国的な教育研究拠点。
3. 地域活性化の中核的拠点。

この類型区分を見ると、第1類型は同時に第2類型でもあるはずであり、第3類型としての役割を果たさなくてよいのか、という疑問が浮かびます。それはともかくとして、この3つの類型の中で九州大学は、2014年9月末にスーパーグローバル大学創生支援事業タイプA（トップ型）に採択された13大学の中に含まれているわけですから、世界最高の教育研究の展開拠点を目指すべきということになります。

ところで、「世界最高」という表現に明示されているように、教育と研究の両面で各大学についての正当な順位付けが可能であるという前提に、文部科学省と、スーパーグローバル大学創生支援事業を実施している日本学術振興会、及び後者から委託を受けて審査に当たった方々は立っていることとなります。もちろん、その背景に、Times Higher Education社、QS社、上海交通大学等々が、世界の大学ランキングを公表しているという事実があります。

他方、あまり日本では知られていないと思いますが、ヨーロッパには、European League of Research Universities¹⁾ という組織があり、この組織から委託を受けてなされた世界大学ランキングに関する調査研究レポート（Boulton, 2010）があります²⁾。これによると、世界の大学順位付けに最も熱心なのは東・東南アジア諸国、特に中国だとのこと。そして、順位付けのための指標作りは各機関によって特徴があり、これこそ絶対に確かな順位、といえるものはないとのこと。各社等は順位づけのための指標の作成に関して肝心な部分を企業秘密として公開していないとのこと。

ところで、各社が作成している大学ランキング表を眺めると、各社の独自性があるとともに、共通する点があることにも気がつきます。それは、英語圏の大学がたくさん上位にランク付けされているということです。英語圏の大学は英語で授業をしているという理由だけで上位に評価される仕方が取られているのではないかと疑問が湧くほどです。

ランキングの指標が明快なスポーツ競技や、例えば年間営業利益高で容易に比較できる企業については、ほとんどの人が納得できるランキング表を作成することができます。しかし、教育と研究に、それも多様な分野から構成される大学に、ランキングという行為自体が妥当なことかどうかを検討することも、大学人ならばしてもよいのではないのでしょうか。

この点で、「5年目評価10年以内組織見直し制度」という九州大学独特の制度に基づく大学役員の方々

によるヒアリングの中で、私は、研究という点で、同じ分野の他の研究者たちから尊敬されるような研究を行うことが重要である、と主張しました。ヒアリングの場ではあまり話題になりませんでした。学生個人個人の能力を引き出し、それを発展させ、社会に貢献できる人材として送り出すことこそが教育機関で働く私どもの使命とっております。そのためにも貢献しようという高度な研究を実践することもまた、大学教員の使命です。こうした点で、九州大学学術憲章³⁾と教育憲章⁴⁾は含蓄に富み、かつわれわれが常に意識すべきことを示してくれていると思います。同窓生の方々も、一度是非、この2つの憲章を読んでみてください。

この2つの憲章の観点に基づいて、同窓会の皆様からの叱咤激励を今後とも私どもに賜うことができるならば、たいへん有り難く存じます。この4年間、至らない点も多々あったかと思いますが、この場を借りて、同窓会の皆様はもちろんのこと、貝塚地区事務部の皆様、箱崎文系地区協議会の皆様、そして経済学研究院の先生方などなど、支えていただいたすべての方々に厚く御礼申し上げます。

【注記】

- 1) アムステルダム大学、バルセロナ大学、ケンブリッジ大学、エジンバラ大学、アルバート・ルートヴィヒス大学（フライブルク大学）、ジュネーヴ大学、ルプレヒト・カールス大学（ハイデルベルク大学）、ヘルシンキ大学、ライデン大学、レウヴェンカトリック大学、インペリアル・カレッジ・ロンドン、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン、ルンド大学、ミラノ大学、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ミュンヘン大学）、オクスフォード大学、ピエール&マリー・キュリー大学（パリ第6大学）、パリ南大学（パリ第11大学）、カロリンスカ・インスティテュート・ストックホルム、ストラズブル大学、ユトレヒト大学、チューリヒ大学が構成メンバーである。もちろん、このコンソーシアムに属さない大学であっても、教育研究でそれらに勝るとも劣らない実績をあげ、かつ名声を博している大学はある。例えば、思いつくものを順不同で挙げてもロンドン・スクール・オブ・エコノミクス&ポリティカルサイエンス、ミュンヘン工科大学、アーヘン工科大学、スイス連邦工科大学、ザンクトガレン大学などがある。
- 2) Boulton, G. (2010) University Rankings: Diversity, Excellence and the European Initiative. Leuven: LERU Office. 著者はエジンバラ大学教授。次のウェブサイトから、その報告書をダウンロードできます。
http://www.ireg-observatory.org/pdf/LERU_AP3_2010_Ranking.pdf
- 3) 次のウェブサイトから、九州大学学術憲章を閲覧できます。
<http://www.kyushu-u.ac.jp/university/charter/research-j.php>
- 4) 次のウェブサイトから、九州大学教育憲章を閲覧できます。
<http://www.kyushu-u.ac.jp/university/charter/education-j.php>

平成27(2015)年度入学式 新入生341名 平成26(2014)年度卒業式 卒業生310名



同窓会事務局長
藤井 美男氏

平成27年4月7日(火)、伊都キャンパスの椎木講堂で平成27(2015)年度入学式が行われた後、4月9日(木)に箱崎キャンパス大講義室にて経済学部

オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻（九大ビジネススクール、略称QBS）の入学式は、4月11日(土)に、箱崎キャンパスの国際ホールで開催されました。入学者総数は341名で、内訳は経済学部経済・経営学科155名、経済工学科94名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻48名、産業マネジメント専攻44名です。経済学部オリエンテーションでは、貫正義同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

3月25日(水)には、福岡リーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修士生の卒業記念祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は243名で、うち経済・経営学科156名、経済工学科87名です。経済学府修士課程修士生は27名で、うち経済工学専攻9名、経済システム専攻18名、産業マネジメント専攻40名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も、山本健児研究院長により行われました。以下が平成26年度

の授与者です。

修士論文・プロジェクト論文

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 経済工学専攻 | 張 国健 |
| (2) 経済システム専攻 | 高橋 千遥
有田 一輝 |
| (3) 産業マネジメント専攻 | 豊田 真季
円田 圭亮 |

成績優秀者

- | | |
|-------------|---------------|
| (1) 経済・経営学科 | 南 裕也
小田晋太郎 |
| (2) 経済工学科 | 堀内 将吾 |

昨年以降卒業式が伊都キャンパスの椎木講堂で行われるようになり、卒業生・修士生の箱崎キャンパスへの移動に時間がかかるようになりました。福岡リーセントホテルでの卒業祝賀会も時間を後にずらすなど、かつてとは勝手の違うやり方となっています。しかし各支部の皆様方を始め大勢の方々の御協力により、年度末・始の諸行事をつつがなく終えることができました。心より感謝しております。

昨年も記しましたが、文系4学部の伊都キャンパスへの移転はあと3年ほどと予定されている中、その移転後卒業祝賀会をどのように開催するのか全くの未定で、これから考えていかなければならない課題です。

もう一つの課題は、新入生の会費納入率向上です。昨年は入学後しばらくして未納者へ追加の依頼を行ったところ、想定以上の効果がありました。今年も同様な方法を含め、納入率を少しでも高める工夫をしていきたいと考えています。今後も貫正義会長を筆頭に、各支部同窓会の皆様方へ一層の御協力をお願い申し上げ、新年度の御挨拶といたします。

か12名の役員参加にて開催しました。

理事会では、昨年7月総会以降の支部活動状況を報告し、本年度の卒業祝賀会、新卒者歓迎会、7月総会の企画内容について協議しました。今年7月の総会では、記念講演に新しく経済学府研究院長に就任された磯谷教授に「ピケティ『21世紀の資本』を読み解く」（仮題）の講演をお願いすることになりました。

2. 現役生・新卒者との交流会

昨年12月20日に「九大OBOG現役懇親会」を品川

支部だより

東京支部

1. 理事会の活動状況

平成27年2月9日(月)午後7時から学生会館303号室にて、本年度第1回目の理事会を初井支部長ほ

で開催しました。これは、「鷺崎ゼミ」と若手理事を中心として、鷺崎ゼミ東京合宿のうちの一日を利用して、他ゼミの卒業生も含めて実施したものです。33名（現役学生15名、卒業生15名、先生1名、他学部卒業生2名）の参加があり、互いの仕事内容や就職活動等についての情報交換やアドバイスをを行いました。経済学部同窓会東京支部では、東京同窓会とともに、学生の就職のサポート活動を計画しています。卒業生の協力をお願いします。

また、今年も、4月11日(土)に、第5回目の「新卒者歓迎会」を開催します。関東方面に就職する卒業生・就職活動中の学生に、先輩から様々な情報を提供するとともに、若手卒業生の交流の場としていきたいと思っております。



九大OBOG現役懇親会

3. その他の活動内容

- ①第16回九大・北大合同フロンティア・セミナー（11月16日）ステーションコンファレンス東京
- ②九大法学部東京同窓会（11月20日）学士会館
- ③若手理事会（12月20日）品川・アウトバック
- ④九大・北大合同報告会（1月10日）都市センターホテル
- ⑤九大東京同窓会理事会（1月10日）九大東京オフィス
- ⑥九大経済関西支部総会（2月21日）大阪・弥生会館

4. お知らせ

- (1) 東京支部では、平成22年9月より、Twitterを、平成23年秋からFacebookの利用を開始しています。皆様の「いいね!」やコメントなどよろしくお祈りします。
- (2) 理事会や同窓会関係行事の様子は、東京支部通信及びFacebookで記事と写真の掲載を行っております。http://dousou.cocolog-nifty.com/
なお、東京支部の活動状況は、http://homepage1.nifty.com/dousou/のトップページwhat's newからも見ることができます。
- (3) 今年の七夕総会は、7月7日(火)午後6時か

ら学士会館にて、開催します。懇親会は、7時15分頃からになります。同窓会報に同封しております申込用紙に氏名等の必要事項をご記入のうえ、事務局宛にファクシミリでお送りください。または、事務局のEmailアドレスへご送信ください。なお、Facebookからの申込みもできます。

【東京支部事務局長 吉元 利行 1978(昭和53)年卒】

関西支部

2月21日(土)、JR大阪駅近くの弥生会館において、第40回目の関西支部総会が行われました。当日は晴天に恵まれ、大学や同窓会本部、福岡支部、東京支部、法学部関西支部からのご来賓と会員併せて55名にご出席いただきました。

第一部の総会は、谷村信彦理事(平成3年卒)の司会進行で始まり、冒頭、石橋英治支部長(昭和36年卒)が退任のご挨拶、そのあと小森田憲繁新支部長(昭和46年卒)がご挨拶。引き続き、中野光男事務局長(昭和50年卒)から行事報告、行事計画案、役員人事案の説明と会計報告が行われ、議案は全て原案通り承認されました。その後、山本健児経済学研究院長から大学の近況についてご報告がありました。

第二部は貫正義同窓会長(九州電力会長・昭和43年卒)から、「電気事業をめぐる課題」というテーマでご講演いただきました。その中で原子力発電所の再稼働の問題、太陽光発電等の代替エネルギーの問題、電力会社の経営努力の現況等電力会社の抱える様々な課題、展望などについて具体的な数字を交えて、他では聞けないような興味深いお話をお伺いすることが出来ました。

第二部終了後は会場を移し、進行も清丸泰司事務

関西支部総会
講演 貫正義同窓会長

小森田憲繁新関西支部長

局長代理(平成2年卒)に変わり、第三部の懇親会が開演。冒頭、同窓会連合会山縣代表理事からのメッセージを披露した後、85歳になられる棚倉亨先輩(昭和27年卒)による元気あふれる開会のご挨拶に続き、ご来賓として、それぞれ大学・本部から児玉名誉教授、東京より初井勝人支部長(NHK会長・昭和40年卒)、福岡より貫正義会長兼支部長(前掲)、最後に法学部の徳永幸彦関西支部長からご挨拶をいただいた後、再び貫正義同窓会長のご発声による乾杯で歓談に移りました。

久しぶりの再会でお互いの近況報告で旧交を温め合うなど、会場のあちらこちらで話が弾んでいました。途中佐野彦彦顧問(昭和38年卒)の指揮のもと、応援歌「見よ紺碧の」を聴いた後、学生歌「松原に」を全員で斉唱、会場は大いに盛り上がりました。中締めは最高齢の九州帝国大学卒の内田勝敏先輩(昭和22年卒業)よりご挨拶をいただき、盛会裡に懇親会を終えました。

関西支部では今後、5月16日(土)の見学会(神戸市、兵庫県立美術館と櫻正宗記念館)、9月12日のゴルフ会(宝塚高原ゴルフクラブ)、11月14日(土)の野外勉強会(大阪城公園と歴史博物館)などの行事が予定されています。関西におられる同窓生の皆さんの多数のご参加をお待ちしています。

【副支部長 太田 光一 1971(昭和46)年卒】

福岡支部

第57回交流ゴルフ会

平成7年卒の堀です。今回初めて参加しました。同窓生ならではの和気あいあいとしたアットホームなゴルフ会で、日頃のストレスも吹き飛びました。初参加者の身ではありますが、会の良さを皆様に紹介したく、この原稿を担当させていただきました。

今回は8組32名の参加で、前回の4組から参加者が大幅増となったそうです。驚くほど幅広い層の方々が参加されており、年齢層では、昭和26年卒～平成9年卒、ゴルフのスコア(グロス)では、80台～150台、職業では、第一線を引かれた方、議員、地場企業や全国企業・九州支店の勤務者など、同窓生という共通点以外は、色々な意味で多様な方々の集まりでした。参加者からは、「敷居が高い会と思っていたけど、貫会長も気さくな方で交流し易かったし、参加者同士の会話も刺激になった」(若手の初参加者)との声や、「100歳でエージシュートを目指します」(年長者)との声など、この会を楽しみ

にしながら励みにする旨の意見が多数聞かれました。会の終了時には、幹事役の交替が披露され、長年この会の幹事役を勤められた嶋田正明さん(昭和54年卒)から、橋本上さん(昭和59年卒)と高田賢一さん(平成5年卒)へ交替となりました。嶋田さん、長年にわたりお世話いただき、ありがとうございます。

福岡支部では、このゴルフ会を総会と並ぶ主要行事の一つに育てたいとの意向です。皆さん、普段のコンペと一味違う同窓会ならではのゴルフ会を一緒に楽しみましょう。

【堀 正英 1995(平成7)年卒】



第57回交流ゴルフ会 平成26年11月16日 於 伊都ゴルフ倶楽部

次回ゴルフ会は、平成27年5月17日(日)、伊都ゴルフ倶楽部にて開催いたします。午前8時25分より、10組予約済です。登録メンバーの皆様へは既にご案内しておりますが、多くの同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。

サロン会

恒例の研究院長による卓話と新年会とで構成する1月例会を1月16日(金)、九経連会議室において開催いたしました。児玉正憲名誉教授をはじめ17名が出席しました。

当日は、第一部として山本健児・九州大学大学院経済学研究院長より、「九州大学の国際化の現状について～経済学研究院・学府・学部の将来に向けて」と題して卓話をいただきました。

九州大学は2014年9月26日、世界大学ランキングトップを目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象としたスーパーグローバル大学タイプAに採択されました。今後10年間にわたり、毎年5億円の補助金が支給されます。九州大学の提案は、戦略的改革で未来へ進化するトップグローバル研究・教育拠点の創生(SHARE-Q)により、世界を牽引する我が国の高等教育研究を上位目標に、世界的研究・教育拠点を確立し、グローバルオペキャンパスの形成や研究教育ポートフォリオの組み替えをアウトプットとします。

そういう中で、経済学部としてはグローバル・ディプロマプログラム（DP）を創設することとし、グローバル化のなかで新たに生じる社会経済問題の解決に貢献できるチャレンジ精神旺盛な人材を育成することとしております。

グローバルDPがめざす人材は、①グローバル展開を行う企業で活躍する人材、②グローバル対応が必要な公的機関等で活躍する人材、③大学院修士課程に進学し、高度な専門性をもってグローバルに活躍する職業人、④大学院修士課程・博士後期課程に進学し国内外の大学・研究機関や国際機関でグローバルに活躍できる研究者、とされています。

このようなことから、グローバル化社会のなかであって活躍する後輩の輩出を期待したいと思います。

第2部は、「トリブドウ渡辺通り店」に場所を変え、新年会を開催しました。最年長の原田準一氏（昭和26年卒）の乾杯の発声に続いて、卒業生同士、近況報告や今年の抱負などを述べ合い、和やかに歓談して新たな年の門出を祝いました。

【福岡支部事務局長 平井 彰 1980（昭和55）年卒】

大分県支部

大分県支部の第18回総会及び懇親会を、11月21日（金）18時30分から、27名の会員が参加し、大分市のトキハ会館で開催しました。

総会では、高山支部長の挨拶の後、議事に移行前年度の経過報告・決算を承認、任期満了に伴う役員改選をして終了しました。

その後、九州電力（株）執行役員大分支社長の亀井英次氏（昭和54年大学院工学研究科修了）による

「電気を安定してお届けするために」と題する講演が行われました。県内に立地する新大分発電所や八丁原地熱発電所の紹介、九州の電力供給に占める大分県の役割、さらには現場で活躍する人々の苦労話、今後の電力供給の方向性など、多岐にわたる講師の説明に出席会員一同、熱心に聴講しました。



右から、高山泰四郎支部長、貞包博幸副支部長

引き続き懇親会が開催され、貞包副支部長の挨拶・乾杯で参加者の交流が始まりました。初参加となった平成元年卒の原賢大氏（九電）、10年卒の大原俊範氏（大分県庁）がスピーチで今後の継続参加を宣言すると、先輩達の大喝采を浴びた。また、56年卒の井上桂太郎氏は、学問の道を究めるため5歳にして一念発起して県庁を辞し、本年4月九州大学大学院に入学した心境を披露した。

最後に校歌「松原に」を全員で合唱、21時過ぎに、新たに就任した田中副支部長の初仕事として万歳三唱を行い、再会を期して閉会しました。

【大分県支部事務局長 油布 正春 1974（昭和49）年卒】



追悼 故伊東弘文先生

さようなら、伊東先生



熊本学園大学教授
中村 良広氏
1974(昭和49)年博士入

2014年の夏、伊東弘文先生が他界されました。8月のことだったと藤田昌也先生にうかがいました。あれからもう半年近くになりますが、時が経つにつれて深い喪失感を覚えています。

伊東先生と私は6歳しか年齢は離れていませんが、確かに「先生」と「学生」という関係にありました。私は、1968年に北九州大学の商学部に入學いたしました。2年次の秋、3年次からの演習を選択する際に、学部の全教員が壇上で自己紹介されました。その際に、小柄で、ほとんど学生と変わらない若い教員が登壇されたので、ややあっけにとられた記憶があります。先生は九大大学院の修士課程を修了後、直ちに北九大に助



手として採用されたそうですから、私が目にした先生は25～6歳だったことになります。

伊東先生のゼミには入りませんでした。3年次の後期から親しくご指導いただくことになりました。入学以来の友人であった田中廣滋君（現在中央大学教授）に「九大の大学院に行かない？」と誘われて、もともと「モーレツ社員はかなわないし、気楽な公務員にでもなるか」と考えていた私は、「好きな読書三昧でメシが食えるなら、それもいいか」と、かなり見当違いな期待を抱いて大学院受験を決めました。当時、入学試験では外国語2科目が必須でしたから、英語以外にも1科目を勉強しなくてはなりません。第二外国語で文法程度なら何とかできるというのはドイツ語だけでしたから、学期の途中からでしたが、すでに田中君が受講していたドイツ語の外書講読に加えていただくことにしました。そこでご指導いただいたのが伊東先生だったわけです。

このドイツ語外書講読の受講生は確か3名でしたから、私は非正規ながら4人目の受講生となったわけです。テキストとしてはドイツ経済史および哲学に関する独文のプリントが使用されました。ごく少人数の授業ですから、先生の研究室で行われました。その際、記憶に残っているのは、毎回授業開始前にサービスされたコーヒーです。インスタントコーヒーなのですが、粉を熱湯で溶いたあと、アルミ鍋を電熱ヒーターにかけて沸騰させるというのがミソです。「こうすると、香りがひきたつ」というのが伊東説でした。

また、もう一つ印象に残っているのが、「人より仕事をしようと思えば、早起きをすることだ」という言葉です。その時は「そんなものか」と思った程度でしたが、実はご本人はそれを長年にわたって実践されていて、のちに九大に移籍されてからも毎朝7時前には研究室に到着するという生活スタイルを

厳格に守られたそうで、その強じんな精神力にはほとんど感心させられました。午前中に5時間ほど仕事しておけば、午後は雑用にかまけることになっても、それなりにまとまった仕事ができるということです。

1986年のことですが、当時鹿児島大学に勤務していた私は、9月から半年間ほど東大社研の加藤榮一教授の下で内地研修をさせていただきました。大学院生のころから尊敬していた加藤教授の下で研修ができるのは嬉しいことでした。時折、加藤教授に東大農学部の前にあった浅瀬川という小料理屋に飲み誘っていただいたのも楽しい思い出です。そんなあるとき、杯を傾けながら教授が、「今度、九大の伊東君にうちで博士号を出すことになったんだ」と打ち明けられました。主査は加藤教授です。その際、「やっぱり、財政学の本チャンは制度論なのかな」と漏らされたことが印象に残っています。伊東先生の業績の核心がここにあるということでしょう。口頭試問の後、伊東先生は1人住まいの私のアパートに泊っていかれました。「どうもうまく答えられなかったな」と少し苦にされた様子でしたが、博士号は無事授与されることになりました。このとき博士論文として対象になったのは、この年の1月に出たばかりの『現代西ドイツ地方財政論』（文真堂）です。本書は東西ドイツ統一後には内容を増補して『現代ドイツ地方財政論』（同）とされ、現在でもドイツ地方財政を研究する者にとって必読の基本文献で、私も随分お世話になりました。

伊東先生のドイツ地方財政に関する業績として、もう一つどうしても逸することができないのは、W・レンチュ著『ドイツ財政調整発展史』の翻訳です。1999年に九州大学出版会から公刊されましたが、訳書で500頁に近い大著で、早朝から研究を開始されるためまぬ努力の積み重ねの成果です。ケルン大学留学中に、ハンスマイヤー教授からこの分野の基本文献として紹介されたそうです。この訳書も、伊東先生の著書とともにドイツ地方財政研究における基本文献として、長く残る成果です。

伊東先生はその社会活動においては、税制調査会の専門委員など各種委員を歴任されましたが、特筆すべきは地方財政審議会会長として活躍されたことです。地方財政審議会会長への就任は九大では



九州大学大学院経済学研究院 矢田俊文・伊東弘文・高哲夫・河野哲夫・東定宣昌教授 送別会 H16.3.15 於 福岡リーゼントホテル

前例のないことでした。この方面での活動についてもご紹介したいのですが、紙幅が尽きました。「会うは別れの始め」といいます。けれども、かけがえない出会いもあります。先生には沢山の教えをいただきました。楽しい思い出もいただきました。有り難うございました。

伊東先生の 魂の旅立ちを祝おう



長崎大学経済学部教授
赤石 孝次氏
1984年(昭和59年)博士入

平成26年10月5日、伊東弘文先生が亡くなりました。先生の御意向でご親族を中心にご葬儀が行われたとのことで、悲しみに接したのは10月末のことでした。覚悟はしていたとはいえやはり心に風穴があいたことは紛れもない事実です。一昨年末に奥様から冬を越せそうにないのご連絡をいただき、昨年2月末に入院先をお尋ねした折にお会いしたのが最後となりました。会話を交わすことは叶いませんでしたが、病室で呼びかけると、目で私の所在を確かめるような仕草をされたことが忘れられません。

先生に最初にお目にかかったのは、先生のドイツ在外研究壮行会を兼ねて開催された1982年の研究会でした。そこで先生はヴァイマル期ドイツにおけるJ. ポーピッツの市町村財政調整論に関するご報告をされたのですが、制度論的財政学の緻密な分析にもとづきドイツの市町村財政調整の淵源を鮮やかに描き出されたご報告にただ圧倒され、学問の奥行きに触れた記憶が残っています。

4年後に先生が九州大学に赴任されたのを機に指導教員としてご指導を受けることになったのですが、赴任と同時にそれまでの成果を『現代西ドイツ地方財政論』に結実され、学会や政策提言の場で確固たる地位を築かれることになりました。そうなりますと当然院生の指導の時間などないと思われるでしょうが、土日も関係なく、毎朝7時前には研究室に入られ、ご自分で選ばれたコーヒーを楽しみながらその日の仕事の段取りを考えられ、限られた時間を有効活用して研究に集中するという日常を過ごされていました。

この朝の時間であれば必ずお会いできると思い、おいしいコーヒーを味わえるという下心もあって、よく研究室を訪ねていたのですが、冷や汗をかいて研究室を退散するのが常でした。最初は美術からクラシック音楽、文学にまでおよぶ幅広い話や様々な研究者の知られざるエピソードの話がされるのですが、学会の話がでてきたら要注意でした。「ところで、昨日刊行された〇〇さんの論文は読んだかね」「…」「それじゃ、〇〇さんの論文は?」「…」の連続です。コーヒーを味わうどころではなく、資料室に直行です。ある日、きっと先生は忙しいので耳学問をされたいのだと思い、いい加減な受け答えをしていると、「それでは第〇章で主張されていることと矛盾しないかね」と問われ、先生は確かに読んだ上で話をされていると畏れを覚えました。至福のひとつきを邪魔されたうえに、議論の相手もできない院生が訪ねてくることは耐え難いことだと思いましたが、いつも笑顔で迎えてくださることに甘え続けておりました。財政学領域の研究をしていた院生は九大では当時私一人で、今思えば院生時代に経験する侃侃諤諤の議論を少しでも体験させようとの親心だったのでしょう。

その後・九州大学の退官を待たずに、病を押して地方財政審議会会長に転職されたのですが、もしかするとポーピッツの後姿を追われていたのかもしれませんが。コーヒー・タイムに、ポーピッツの『将来の地方財政』に巡り合われたことがご自身の財政研究の出発点であったことを語って下さったことがありました。その折、官僚兼学者として命の危険にさらされながら政権への批判を展開し、ヒトラーに惨殺されたポーピッツの話がされながら、命の危険に直面することがないにもかかわらず、政権への批判に躊躇する今の研究者の姿を嘆いておられたことが思い起こされます。地方交付税交付金改革も国のあり方の基本を踏まえた議論でなくてはならないにもかかわらず、そのことがともすれば忘れられがちなこと強い危機感を持たれて上京されたのかもしれませんが。しかし、その思いは病によって道半ばにして絶たれてしまいました。

谷川俊太郎が言うように、死は行き止まりではなく、体から解放された魂の旅立ちとも考えられます。その意味からすれば、ともすれば体の存在が阻んできた国のあり方の基本を問い続ける真の自由を勝ち得られたのではないのでしょうか。そして、ポーピッツと財政調整のあり方を議論する至福の時を楽しんでおられることでしょう。先生とポーピッツとの旅

はまだ続いている。そのように考えると、先生の死を魂の新たな旅立ちとして祝うことが、私たち残さ

れた者にとって最も適切であるという気がしています。

追悼

故 浜砂 敬郎先生

追悼 浜砂敬郎君の急逝を悼む



九州大学名誉教授
大屋 祐雪氏
1951(昭和26)年卒

浜砂敬郎君は、本年8月26日、ドイツのフランクフルトで客死した。当時、私は肺炎治療のため福岡日赤病院に入院中であった。私が退院したときには、浜砂家ならびに洋子夫人のご兄弟と私のゼミの世話人、経済統計学会の有志の方々と御遺骨の帰宅までのおおよその段取りがすでに終わっていた。

彼のフランクフルトからの私宛ての便りによれば、(この便りが私宛の彼の最後の便りになりました)彼は「例年のように、7月31日に福岡を発って、8月1日よりフランクフルトに滞在、週末は終日ベッドで日本から持ってきた和書(『ブレンターノ自叙伝』)を読み耽っていたとのこと、気候の急変にも慣れて、いまは勉強に復帰しています」と記している。「私の受け入れ人のノイバウアーさん(グロマン先生の後任)も週3回の透析を要する腎臓病を患い、また、長年協力してもらった連邦統計局の人口統計課長も9月に定年なので、私のフランクフルト行きも転機に來たかな!というのが、今日この頃の多少の感慨です」。「いま、来る9月11日の経済統計学会(京大;お手元にプログラムが届いていると存じますが)と、9月15日の日本統計学会(東大)で報告するテーマに集中して勉強しています。この年齢になって、同時に二つの報告をするのは無理かな!と思案もしましたが、問題は相互に関連していて、前者で報告する“統計登録簿におけるデータの流れについて”と、後者、東大での報告は“統計登録簿への情報移転過程に関する実務家の現状総括”で、国際的な指導的統計家が世界各国の政府統計関係者向けに開いた研修テキストなので、私も読み、西村君(大分大学)と共訳もしています(『九大経済学研究』)が、これだけ国際的な文献が日本では未だ知られていないことから、“政府統計のための行政データ表示と第二次的データ利用について”の

論題で報告することになりました。統計局の人たちに(どう理解してもらえるか)あれこれ考えているところです。「前者は10月末締め切り『経済学研究』(創立90周年記念



号)に、後者は、依頼されている平さん(同志社大学)の退職記念論文集に出す予定です」。上記が、浜砂君の8月中旬ごろまでのフランクフルトでの動静です。

後日に判ったことですが、彼は8月26日にノイバウアーさんを訪問することになっていたようです。おそらく帰国挨拶のためであったろうと思われる。その前後の彼の動静はつまびらかではありませんが、日本統計学会大会事務局、および京都の経済統計学会への報告予稿集等への送付や帰国の準備に忙殺されていたであろうことは、想像に難くありません。さらに私なりの勝手な憶測をここで許されるならば、勉強と酒と内・外人の区別無く人間好きの彼のことであるから、学会の準備も終わったことだし、フランクフルトとの別れを惜しんで、行きつけのピヤホールかワインバーで、一人、あるいは顔見知りの人と“乾杯”のグラスをあげて宿舎に帰り、ベットインしたと思われる。

ところが、ノイバウアー先生との約束の26日、先生のところに彼が現れないので、先生は、彼が来ないのは何かの都合だろうと思われて、翌27日、彼の居室にコールされたところ応答が無いので、大学事務の担当者とともに入室されたところ、彼はベッドに横たわったままの姿であったと伝えられています。

私にとっては言うまでもないことですが、彼の親しい友人、知人にとっても、彼の訃報はまさしく晴天の霹靂でした。電話を受けたある友人は“ウソ!”と、絶句したまま次の言葉も出なかったと語られています。帰国後の9月3日、大学院で親しかった友人数人で木下悦二先生を囲み『焼き鳥・ふじよし』で一杯やることを浜砂君が提案し、友人の一人にその設営を依頼してフランクフルトへと出発しています。

彼のあまりにも突然の客死なので彼に贈る適切な言葉も頭に浮かびません。せめてもうあと5年生きて、社会科学に基礎をおいた統計並びに統計行政の研究に、これまでどおり情熱を傾けて成果をまとめ、

そのあと、「私への弔辞」も書いて、君が好きなフランクフルトで君の学問の最後を終わってもらいたかった。順序が「逆（さか）様ではないか」と大声を出して「グチりたい」心境を今なお抑えがたい。

浜砂君！君を縛っていた“研究”という名の呪縛からも今は解放され、君が大好きな酒やワインにも手が届かないのだから、これからは、君が深く愛しながらも口に出せず、迷惑だけを掛け続けてきた洋子夫人の懷で安らかに眠ってくれ。

それでは、しばらく、さようなら。 合掌

2014年 晩秋

ごあいさつ



送る会世話人代表

九州大学名誉教授

近 昭夫氏

本日は、お忙しい中、「浜砂敬郎先生を送る会」にお集まりいただきましてありがとうございます。

私達の友人であり、同僚であった浜砂敬郎さんが亡くなられてからほぼ3カ月経ちました。8月の末に訃報に接した時には、びっくりしてしまいました。その時には、どうしたのだろうと、思うばかりでした。しばらくして、少し落ち着いてから何人かのひとが集まりまして、浜砂さんといろいろなことでお付き合いのあった方々にお出でいただいてそれぞれの交友の思い出を語りながら、彼を送る会をもとうではないかと云う事になり、本日に至りました。私たちの呼びかけにこたえて、お集まりいただきまして、お礼を申し上げます。

この間の事情につきましては、奥様に伺いました。浜砂さんは、九大在職中から、ここ10年以上、夏休みはフランクフルト大学に滞在し、研究されておりました。フランクフルト大学経済学部の統計学研究室は、社会統計学、経済統計学の研究の長い歴史と伝統があり、現在でもドイツのトップ・レベルの研究室として知られております。私たちは外国へ行くと、適当に息を抜いて観光に出かけたりしますが、浜砂さんは、たいていはフランクフルトに留まって、勉強をされていたようです。

今年も7月31日にフランクフルトに出かけ、8月31日にフランクフルトを発って、9月1日に帰国する予定だったようです。8月28日の夜9時頃に、フ



浜砂敬郎先生を送る会
2014年11月23日 於 都久志会館

ランクフルトの日本領事館から連絡がありました。彼は、大学のゲストハウスに滞在していたのですが、27日に死亡しているのを、ゲストハウスの家政婦さんが発見した、ということのようです。死因は自然死で、日本でいう心不全という事でした。

その後、フランクフルトで火葬され、9月18日に遺骨が帰ってきました。

9月21日に、家族で葬儀を営まれました。

浜砂さんは、非常に広い範囲の方々と交友されてきたようですので、今日は、皆さんそれぞれのお付き合いのなかでのお話を伺い、彼の生前の様子を思い出しながら、彼の魂が安らかに眠りにつかれるように祈りたいと思います。どうぞ、よろしくお願いいたします。

浜砂先生さようなら —敬愛する兄弟子へ—



鹿島建設株式会社

嶋田 正明氏

1979(昭和54)年卒

一昨年の年末、浜砂先生から電話がかかってきました。いつものように、家内が

受話器を遠くに持って、「はい、浜砂先生からよ」と差し出します。お酒をけっこう飲まれていい調子で、受話器を耳から離さないと大きな声でうるさいんです。「嶋田君、如水庵の森君に、今度の同窓会で、黒田如水のことを話してもらおう、については、君から同窓会事務局に掛け合って、森君が話せるようにしてくれないか?」。その後の成り行きについては、昨年6月の経済学部同窓会総会の講演会で如水庵、森次郎社長の話された通りです。江戸時代から博多部で農業と菓子作りを営んできた森家の家業の発展のために現・森社長が前・社長の父親に伴われて上京し、黒田家から黒田52万石・如水庵の商号の使用について快諾を得た。如水の活躍については、昨

年の大河ドラマ「軍師官兵衛」でご覧いただいた通りです。黒田如水の遺訓が、如水庵の現在の発展に生きているということをご存じの浜砂先生がたしか昭和40年入学で仲のいい森社長を思いやって、軍師官兵衛大河ドラマ放送のタイミングで同窓会での森社長の講演を構想されたと思いました。

昨年8月25日、フラガールズ甲子園に参加する、筑紫女学園の女子高生の応援の東北ボランティアの帰路いわき市から羽田に向かうバスの車中に例の調子で、浜砂さんから大声で電話が掛かってきました。「おーい、嶋田君、大屋先生が日赤病院に入院したと聞いたが、大丈夫かね?すぐにでも見舞いに行ってくれないかな。」「浜砂先生、フランクフルトからですか?」「そうだよ。もうすぐ帰国するから、帰国したら、9月3日箱崎の焼き鳥藤よしで仲間と飲むから」と聞いたのが最後の言葉になりました。大屋先生の奥様に顛末を電話したら、「心臓ペースメーカーの定期点検と検診だから、そんなに心配要りません。浜砂先生に帰国してから、ゆっくり見舞いに来られたらたらいいいですよと伝えてください」と言われ、浜砂先生にメールで伝えようとしていた矢先、8月30日大分大学の西村教授から、浜砂さんが亡くなったと電話がありました。

一昨年の夏も、大屋先生が猛暑で熱中症に罹られたと浜砂先生がフランクフルトで聞きつけて、暑気あたりにはカリウムがいい、カリウムを含むスイカがいいということで、フランクフルトから電話がかかって来て大屋先生にスイカを届けてくれと大騒ぎして、私だけでなく、浜砂先生と同級生の丸孝憲さんまで巻き込んでお騒がせしたのを思い出して、今回の日赤病院への見舞いの一件も、またかと思いました。

浜砂先生は九大退官後も、夏休みは毎年、フランクフルト大学を訪問して寄宿舎に投宿して、統計学の研究が続けられていました。昨年、8月始め、フランクフルトからの便りとして私に届けられた添付メールの内容を、大屋先生に届けてくださいと頼まれました。内容を拝見すると、日本の国勢調査とドイツの諸統計制度と実情に関する深い考察で、私には良く分かりませんでした。死亡の顛末は、8月26日、今回のフランクフルト滞在の最後の行事を終え寄宿舎に帰られたが、翌日のお別れに浜砂先生が現れないので、先方の受け入れ者のノイバウアー先生が浜砂先生の消息を寄宿舎に確認していたところ、死亡が確認されたとのことでした。現地での死亡診断では自然死ということで、心不全か何かと思われる

ると後日ご遺族から聞きました。

浜砂先生の葬儀は死去から一月後、親族だけで行われたとお聞きしました。昨年11月23日勤労感謝の日に、有志で「浜砂先生を送る会」を天神の都久志会館で行いました。経済学部同窓会(福岡)H26.6.6あまり、浜砂先生の信心深い姿は見た覚えがないので、遺影に花を添えるだけで、宗教色なく行いました。九大同級生、統計学会、経済学部関係者、統計学ゼミ先輩・後輩、山の仲間などが集まりました。浜砂先生の写った写真をスライドショーで流しながら、友人、知人が順次浜砂先生への思いを話すという淡々とした内容でしたが、心のこもった温かい「送る会」になりました。

以下蛇足。大屋ゼミの私達にとって初ゼミ合宿で九大山の家、九州国立大学研修所に行った時のことです。研究会と懇親会の席で同級生の堤、下山、中島君と当時はやっていたコントのダジャレばかり話して騒いでいましたので、大屋先生から、私とは縁がなかったものと見なす、山を降りたら私の前に現れないでくれ、と言いつ渡されました。当時の浜砂助手から、彼らは若くて将来もあるからどうぞ大目に見て機会を与えてください、という内容のことを言われ、大屋先生は否定も肯定もされませんでした。その後の大屋ゼミに私達が現れても、大屋先生は私達を追い返されませんでした。

浜砂先生は、学問では客観の視座を持つこと、主体的に考えることが大切だ、とおっしゃいますが、人間関係では親しくなればなるほど、自分と他人の境目がなくなる方だ、と私は思います。浜砂先生の思うこと感じることは、同じく嶋田も感じているんだと。私もそう共感するように、これまで一緒にやってきました。その見境の無さについて行けない人もいるのもたくさん見てきました。でも、その自他の見境の無さが、浜砂先生の最大の愛すべきところだと思います。

いまでも「おーい、嶋田君、今度一杯やろうよ」と電話が掛かって来るような気がします。浜砂先生、いつかあの世で一杯やりましょう。

合掌

<参考>
浜砂先生・1997年シーボルト賞受賞(ドイツ連邦共和国フンボルト財団)。1979年から社会科学、自然科学を問わず日独の科学研究、学術交流に貢献のあった日本人研究者にドイツ連邦大統領より授与される賞。2000年山本健児経済学研究院院長・当時法政大学教授も受賞された。

同窓生健筆模様

中川信義著『世界価値論研究序説』
(御茶の水書房、2014年)を読む

——国際価値論と不平等交換論——



神奈川大学教授

鳴瀬 成洋氏

1977(昭和52)年卒

1979(昭和54)年博士入

はじめに

マルクス派国際経済学の泰斗、中川信義氏は、膨大な研究業績を遺し2011年2月17日に逝去された。本書は、多岐にわたる研究の中から中川氏の代名詞ともいえる国際価値論に関する論考を集めて編まれた遺著である。その内容は2つに大別される。1つは、1950・60年代に日本で行われた国際価値論争の中で鍛え上げた自らの理論の開陳である。もう1つは、1970・80年代に西欧で提起された不平等交換論(unequal exchange)の検討である。小論ではそれぞれの内容を紹介しコメントを付す。

1. 国際価値論

まず、国際価値論の問題領域について述べよう。リカードウは外国貿易の分析において、「一国内の諸商品の相対価値を規定する同じ法則(投下労働価値論)は国際間で取引される諸商品の相対価値を規定しない」と述べており、国際商品交換を規定する法則を解明していない。J.S.ミルは異なる国々で生産される商品の交換は生産費の原理でなく需要供給の原理によって規制されるとし、国際商品交換の原理として、投下労働価値論とは異質の相互需要説を呈示することにより、その隙間を埋めた。しかしその結果、国内では生産費の原理が、国際間では需要供給の原理が当てはまるとされ、価値論は二元化した。これに対して、労働価値論を国際間に適用して国際商品交換を規定する法則を解明することを課題としたのが、マルクス派国際価値論である。以下では、中川氏の国際価値論のエッセンスを次の2点に絞り検討する。

(1) 国際社会における価値とは国際価値であり、その実体は世界労働であり、その大きさは国際社会的に必要な労働時間によって規定される。

商品生産社会では、私的諸労働は諸商品の交換関

係＝価値関係を通じてのみ社会的総労働の諸環として実証され結合される。このような商品を生産する労働の固有の性格から、社会的総労働の諸環たる実を示すという以外の性質を削ぎ落とされた抽象的人間労働が価値の実体となり、そのような労働の継続時間、すなわち社会的必要労働時間によって価値の大きさは決定される。中川氏は一国経済におけるこの規定は国際経済においても成り立つとし、次のように述べる。各国民の私的諸労働は、国際商品交換によってのみ世界総労働すなわち国際分業体制の諸環として実証されるとともに、他の私的労働との同等性を証明される。この同等性は価値としての同等性であるが、ここでの価値は国際価値である。そして国際価値の実体は世界労働であり、その大きさは国際社会的に必要な労働時間によって規定される(59ページ)。

そして、価値法則は国際間に適用される場合、修正されることを述べたマルクスの「価値法則の修正命題」に依拠して、以上のことを論証する。修正命題の内容は次の通りである。①資本主義的生産が発展しているほど国民的労働の強度も生産性も国際的水準より高い。②そのため、国際間では同じ労働時間に同種商品の異なる分量が生産される。③それらの同種商品の異なる分量は異なる国際的価値をもち、国際的価値はその大きさに比例して異なる貨幣額で表現される。④だから、貨幣の国民的価値は先進国の方が後進国よりも小さい。⑤したがって、貨幣で表現された名目賃金は先進国の方が大きくなるが、実質賃金もそうだという訳ではない。

中川氏は修正命題を次のように解釈する。その要は③の国際間では同じ労働時間で異なる国際的価値が生産され、異なる国際的価値はその大きさに比例して貨幣表現される、という点にある。これは、同じ1労働時間でA国では1000フラン、B国では2000フラン、C国では3000フランという異なる国際価値が生産されるということである。これが成り立つのは、各国の生産力に比例して、同じ1労働時間でX



著者 故 中川信義先生
大阪市立大学名誉教授
1966(昭和41)年博士入

御茶の水書房
2014年9月刊行

財がA国では10個、B国では20個、C国では30個生産され、X財が世界市場で1個10フランという同一の価格で売られているからである(66ページ)。また、このことから、貨幣の国民的価値は先進国ほど小さくなる(下記の表参照)。

各国がX財だけを生産しているのであれば、以上の解釈は許容できる。しかし、各国は複数の商品を生産している。いま、A国、B国、C国が1労働時間でY財をそれぞれ1個、5個、10個生産しており、世界市場でY財1個が20フラン(金20グラム)で販売されているとしよう。この場合には、金1グラムの代表する国民的労働はA国で1/20労働、B国で1/100労働、C国で1/200労働となり、本来1つであるはずの各国の貨幣価値が二重化することになる。国際社会的必要労働時間を体化した国際価値が成立していることを前提として修正命題を解釈することには無理があると思われる。

(2) 国際価値の具体化が国際市場価値であり、国際市場価値は個別的価値の加重平均で決定される。

これまで国際価値を与えられたものとしてきたが、それはどのように決定されるのか。中川氏は市場価値論を国際的に適用することによってこれに答える。世界市場における生産者間の競争という条件の下で国際価値が具体化されたものが国際市場価値であり、それは、上位、中位、下位の生産条件の下で生産された同種商品の個別価値の加重平均によって決まる。その結果、国際市場価値以下の個別価値で商品を生産する先進国の資本は国際超過利潤を獲得するが、後進国の資本は利潤の一部を実現できない。そのため、各国資本は費用価格を低廉化し個別価値の引き下げを図ることになる(121～122ページ)。

国際市場価値は国際的需要に適合した世界労働の配分が実現されるという条件の下で成立する(124ページ)。しかるに、比較生産費説は貿易が開始されると国際的需要に応じて各国労働の配分替えがなされることを示したが、上記の国際市場価値論では先進国がすべての商品で後進国を売り負かすことになり、各国は比較優位にある商品を相互に交換することによって利益を得るという比較生産費説に反することになる。両者の整合性が問われるであろう。

	1労働時間で生産されるX財の量	X財1個の国際価値	1労働時間の貨幣表現	金1グラムが代表する国民的労働
A国	10個	10フラン＝金10グラム	100フラン＝金100グラム	1/100労働
B国	20個	10フラン＝金10グラム	200フラン＝金200グラム	1/200労働
C国	30個	10フラン＝金10グラム	300フラン＝金300グラム	1/300労働

(注) 金1グラムに付けられた名称を1フランとする。

2. 不平等交換論

エマニュエルを嚆矢とする不平等交換論は、低開発の一因とされる途上国の交易条件悪化の原因を究明したものである。現代の世界経済では、労働力は一国内に固定され賃金率は国際間で異なるが、資本は国際間を自由に移動し利潤率は国際間で均等化する。そうすると、賃金率の国際的格差が大きいくほど低賃金国(途上国)の商品の価格は高賃金国(先進国)に比べ低くなる。こうして交易条件の悪化が生じ、それは途上国から先進国への価値の移転をもたらす低開発の原因となる。

不平等交換論に対する中川氏の批判は次の2点である。第1は、不平等交換(交易条件の悪化)とは、不等価交換すなわち国際価値から乖離した価格での交換が行われているのではなく、等価交換すなわち国際価値ごとの価格での交換が行われているが、不等労働量交換＝国際的搾取が行われているということだ、これを明確にすべきだとの批判である。第2は、多国籍企業の活動に見られる資本の国際移動は利潤率の国際的均等化をもたらすものではないという批判である。

これらの批判は的確であるが、後者の点について考察したい。中川氏は利潤率の国際的均等化の仮説の上に構成された理論は「謬論」(149ページ)であるとしてこれを斥ける。しかし、それは特殊な国際分業を捉えた理論である。不平等交換論を理解する要点は2国の利潤率が均等化する条件である。そのためには2国は最初から1つの経済循環に統合されていなければならない。つまり「西インド諸島ではイギリス資本により熱帯産品の生産が行われており、そこでの産業はイギリスの使用に充てるために営まれている」という構造が前提とされねばならない。このような構造では「イギリスと西インドとの貿易は都市と農村の取引に類似し、植民地における利潤率はイギリスの利潤によって規定される」(J.S.ミル)。これが不平等交換論の原型である。それは、本国の均等利潤率に服する先進国資本が後進国に進出しそこで先進国に提供される諸商品を生産するという、外部世界に組み込まれた経済循環の下での取引を捉えたものである。低開発を生み出すのは交易

条件の悪化による価値の移転ではなく、このような奇形的な経済構造である。不平等交換論を交換ではなく構造という次元で理解することは、低開発問題の核心は国際貿易ではなく低開発

国の労働者の搾取にあるというメイヤーによる批判（74ページ、140ページ）に通底するであろう。

むすび

主流派経済学とは異なる立場から国際経済を理論的に捉える研究には、2つの大きな波があった。国際価値論と不平等交換論がそれである。中川氏はこれらの研究において、マルクスをはじめとする古典や関連する文献を隈なく渉猟して自らの理論を立証している。その徹底さは驚嘆にも称賛にも値する。それから数十年経った現在、3つ目の波が起こる予兆がある。それを起こしたのは、リカードとミルが解きえなかった問題を古典派貿易論の枠組みで解

決する試みである。彼らはともに2国2財モデルで両国とも完全特化という状況を前提として国際商品交換の法則を明らかにしようとしたが、両国とも完全特化という状況は特殊であり、どちらか一国が不完全特化であるのが一般的である。一国が不完全特化であるならば、国際交換が行われる場合も、その国における投下労働量あるいは生産費にしたがって商品の価値は規定されることになり、一国内及び国際間の商品交換が1つの価値論で説明できる。こうした問題提起をマルクス派の立場から受け止め発展させるうえで、中川氏の遺産は大きな財産となるであろう。

書評:中川スミ著(青柳和身+森岡孝二編) 『資本主義と女性労働』



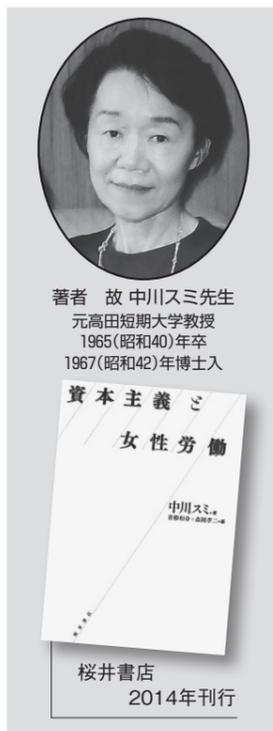
法政大学経済学部教授
大原社会問題研究所所長
原 伸子氏
1977年(昭和52)年博士入

本書は2009年6月に享年66歳で急逝された著者の遺稿を、生前、京都の基礎経済科学研究科において学問的交流があった森岡孝二氏（関西大学名誉教授）と青柳和身氏（岐阜経済大学名誉教授）が編集された遺著である。

本書の内容とその意義について論じる前に、評者と著者の学問的交流について触れておきたい。評者は1975年に大学院経済学研究科修士課程に入学し、その後博士課程に進学した。私は当時刊行が開始され始めた新MEGA（新『マルクス=エンゲルス全集』）の『資本論』草稿の研究にのめり込んでいった。そのころの九州大学大学院には専攻分野の違いを超えて、古典や理論や歴史を重視するという雰囲気があった。私の関心はとくに『資本論』の相対的剰余価値論と蓄積論の草稿にあったのだが、そんな大学院時代の私はいつも10年先輩の中川スミ氏を意識していた。当時経済学研究科の女性は少なく、中川氏の次に入学した女子学生が私であったことも影響している。しかしそれよりも中川氏のフランス語版『資本論』における蓄積論研究は当時学界の大きな話題になっていたし、形成史にもとづいて労賃論・蓄積論を再構成する氏の研究手法が私の問題関心を強く惹きつけたからである。1975年には熊本商科大学（現在の熊本学園大学）で開催された第23回経済理論学会で偶然にお会いして研究テーマについてお話しし

た。その後、関西と東京という距離もあり長いあいだ直接にお話しする機会を持てなかった。しかし1997年以降、私がケンブリッジ大学留学を契機に「経済学とジェンダー」のテーマを研究するようになり、経済理論学会の「ジェンダー部会」を通じて学問交流を続けることができるようになった。最後にお会いしたのは2008年10月に九州大学で開催された第56回経済理論学会であった。中川氏は、闘病中であるにもかかわらず九州大学で開催されるということで参加されたのだと思う。ご体調が良くなかったようにお見受けしたが、その時は一年後に急逝されるなどとは到底思いもよらなかった。こうして中川氏と私は『資本論』研究、とくに形成史を踏まえて剰余価値論・労賃論・蓄積論を研究するという手法において共通していたのではないか。そこには、九州大学大学院の学問的雰囲気も影響していたように思われる。

それでは以下、本書の理論的特徴について述べることにしよう。本書の構成は以下のとおりである。序章 経済学とジェンダー、第1章 家事労働と資本主義的生産様式、第2章 女性労働問題の「特殊性」をめぐる、第3章 「家族賃金」イデオロギーの批判と「労働力価値分割」論、第4章 日本型企業社会における女性の労働と家族、第5章 ジェン



著者 故 中川スミ先生
元高田短期大学教授
1965(昭和40)年卒
1967(昭和42)年博士入

資本主義と
女性労働
中川スミ
著
桜井書店
2014年刊行

ダー視点から見た賃金論の現在、第6章 女性の雇用労働者化と「家族賃金」思想、第7章 賃金の理念をめぐる：労働総研報告書「均等待遇と賃金問題」が提起したもの。さらに「まえがき」（森岡孝二氏）では中川氏の問題意識についての解説、「あとがき」（青柳和身氏）では詳細な解説が付されている。本書の論点は以下のように三つある。

第一は1970年代の「マルクス・ルネサンス」を背景として展開された「家事労働論争」について。この論争の論点は①家事労働は価値を生むか、②家事労働は労働力を生産するか、であった。中川氏は、『資本論』を丹念に整理して価値・労働力の価値・賃金の社会的性格と歴史的な性格にもとづいて次のように結論づけた。家事労働は価値を生まない、なぜならそれは資本主義社会における社会的分業の一環を形成していないから。それゆえ家事労働も労働力の価値を生産しない。重要なのは家事労働と賃労働の両者に共通する無償性（搾取）が資本の剰余価値生産に組み込まれている点である。この点は、フェミニストによるアンペイドワーク論に対する氏の「疑問」とその批判がよく表れている。つまり、ジェンダーの問題とは両性の問題という視点である。

第二は「労働力の価値分割」と家族賃金イデオロギーについてである。「労働力の価値分割」とは労働力の価値が成人男子に支払われるという前提にたって、これが不足する場合にはじめて女や子どもが働きにでるという考え方である。フェミニストの多くは『資本論』で展開されている「労働力の価値分割」こそ、マルクスのジェンダー・ブラインドを表すという。それに対して中川氏は『資本論』では労働力の価値は家族成員に分割されるのではなくて、あくまで「労働者家族の再生産費」によって総合さ

れるものであって、その総合の仕方が歴史的な性格を帯びているとされる。

第三は、「労働力の女性化」と福祉国家による社会保障制度によって、家事労働（家事・育児・介護）は社会化されるとともに労働力再生産機構が家族単位から個人単位に移行しジェンダー平等が達成されるという展望である。

以上、簡単な要約であるが、本書の意義はまず、中川氏がフェミニストによる問題提起を真正面から受け止めて、それを『資本論』の論理にもとづいて批判的に展開している点にある。「家事労働論争」が『資本論』の論理の再検討から始まったことを考えるならば、まず『資本論』にもとづいて検討・吟味することが肝要である。中川氏はそれを精力的に成し遂げた。わが国においては竹中恵美子氏や久場嬉子氏による先行研究はあるが、フェミニストによって広く検討されているわけではない。第二の意義は、中川氏の理論的研究がきわめて実践的問題を提起していることである。それは、家事労働の無償性と市場における賃労働の無償性を二つの無償労働と呼び、その克服の道筋こそ求められる必要があるとされる。これは、現代における労働のフレキシビリティ化と経済格差拡大のもとではとりわけ実践的意味をもつ。その一方、本書では家事労働のなかでも育児や介護などのケア労働に関する労働論としての論点は示唆的に論じられるにとどまっている。現在、広く観察される「社会的リスク」は労働力の女性化とともに育児や介護などの「労働」の独自性とその社会的意味を解明する必要性を浮き彫りにしてきた。中川氏による理論研究と実践研究の方法の視点をケア労働論にそくしてさらに発展させていくことは、われわれに託された学問的課題であるように思われる。

リレー随想

経済学部で学んだこと



元同窓会長
元日経連専務理事・健保連会長

福岡 道生氏

1955(昭和30)年卒

九州大学前の思い出

昨年、経済学部の東京支部同

窓会に久し振りで出席した。懐かしい面々に会えて、大変楽しかったが、その席で、福留久大先生にお会いした。雑談のなかで、つい私が経済学部に入った経緯などを話したところ、是非その話を同窓会報に書いて欲しいとの話になった。今更私が、と強く固辞したが、結局引受けることになった。

私も昨年末で82歳になった。さして丈夫でもない私が、よくもまあここまで生きて来たものと不思議な気がしている。

私の父は母との結婚後、中学の教師を辞めて、広島文理大の学生となった。しかし、卒業間近に肺結核にかかり、療養生活を続けていたが、昭和14年に亡くなった。私が小学校1年の時である。東京女高

師理科出身で、化学を教えていた母は、三人の子供の面倒見を父の妹に期待して、父の郷里の佐賀に移り、県立鳥栖高女に勤務したが、うまく行かず、結局一家は、鳥栖の町営住宅に住むこととなった。

鳥栖小学校5年生の夏、学級全体で農作業奉仕の際、あまりの暑さに耐え切れず、筑後川堤防裏のドブ川に飛び込んだ。そこで全員日本住血吸虫症という、最後は死に至る風土病に罹った。私も連日高熱に悩まされたが、幸い当時の久留米医専の井上教授が、この風土病の治療薬を開発された直後であり、同級生共々久留米まで井上先生通いとなったが、秋には根治出来たのは全く幸運だった。

ある日、新聞で井上先生のご逝去を知り、ささやかな香典を佛前にお送りしたところ、ご子息から丁寧なお便りをいただいた。

原田溥君との再会

昭和20年、久留米の県立中学明善校に入学し、26年に九大に入学したが、第一分校（旧制福岡高校）で原田溥君と再会した。現在、九大名誉教授の原田溥君である。彼とは明善校で同級だったが、父君の転勤で福岡中学（現・福岡高校）へ転校、別れた。

再会した彼に岡崎次郎教授のところへ、アダム・スミス『国富論』の講義会をやらぬかと誘われた。岡崎教授のご自宅は大濠公園の近くで、1年間毎週日曜日に伺い、勉強させていただいた。教授の学識の深さと、人徳に感銘を受けて、それまで全く未知の分野、経済学への興味が、俄然湧いたわけである。

教養部の講義では、岡崎教授は大内兵衛『経済学』（岩波全書）を使われた。期末試験で、成績が95点以上の学生5人の名前を挙げられたが、私の名前がない。あれ？と思っていたら、最後に「福岡道生君は今回の基準でいえば、100点を超える」とおっしゃった。経済学部志望はこれで決まった。

マルクス経済学と近代経済学

経済学部に行っても、原田君を囲む仲間との交友



馬場ゼミ
前列右から4人目女子学生（沖敦子・後の戸村夫人）の
右隣が馬場克三教授。中列右から4人目が筆者

は続いた。この仲間と同人誌を発行したこともある。私も映画評論の形でヒューマニズムについて論じ、それは資本主義・社会主義といった体制と関係なく、高い普遍性を持つと主張した記憶がある。

ある夏、文学部に行った仲間の、大分県山国川治水に関する調査に、皆で同行し、夜は深耶馬溪で、飯盒炊飯、野宿したが、その時見た星空の、たえようもない美しさは、今でも鮮明に覚えている。

経済原論は向坂逸郎教授の経済原論と、栗村雄吉教授の経済原論と両方とも受講した。向坂教授の原論は、経済学の枠を超えた掘りを持ち、大変勉強になったが、学問的に刺激を受けたのは、栗村教授の原論だった。

ワルラスから始まって、ピグー、ケインズ、ヒックス、更にはサミュエルソンに至るまで、非常に丁寧で体系だった講義だった。初めにワルラスの「選好の理論」から入った時、果してこれは学問なのかと思いつつ聞いていたが、サミュエルソンの「加速度原理」に入る頃には、すっかり引き込まれていた。難解といわれた栗村近代経済学であるが、私は当時の旧帝大系の中では出色だったと思っている。

二つのゼミナール

私はゼミナールを二つ受けた。一つは岡橋保教授の金融論。テキストは宇野弘蔵『恐慌論』。関連して読んだのは大内力『農業恐慌』、ポール・スウィージーなどである。私の次の次の経済学部同窓会長だった森山靖章君は、岡橋ゼミのゼミ友である。

経営学の馬場克三教授のゼミでは、モーリス・ドップ『賃金論』が使われた。馬場教授は、個別資本運動論や原価償却論が有名であるが、たまたま私どもの時は「労務管理論」がゼミのテーマであった。後に野村證券に入社した外村忠正君などや、院生も参加して論客も多く、討論も活発で有意義なゼミだったが、私が学問的にも人間的にも大変な影響を受けたのは、馬場克三教授その人の人柄であった。ゼミでは討論に委かせ、多弁な方ではなかったが、何よりも徹底して自分の頭で考えることを重視された。如何に高名な方の学説でも、借物だときびしく批判され、時に叱責された。正に師であり、心酔した。

後に私の八幡製鉄入社が決まり、馬場先生に報告に行くと、「君は大学に残ってくれると思っていた」と言われた。事前に先生からそういう話があれば、私は間違いなく大学に残ったと思う。しかしよく考えてみると、私は本来的に無精者で、とても学者向きではない。途中で挫折した可能性が高い。サラリーマンで良かったと思っている。

後日談であるが、馬場先生が経済学部長の時、八幡製鉄所幹部との懇談の席で、「八幡製鉄は私の弟子を連れ去った」と叱られたと、当時の人事室長が苦笑していた。

「自分の頭で考える」

卒業後も馬場先生には何度かお会いし、お話を伺う機会を得たのは大変幸せだった。馬場門下の大先輩、片山伍一先生とも親しくさせていただいた。

人生にはいろんな危機がある。その都度先生の「自分の頭で考える」教訓の下で、切り抜けてきた気がしている。

九大100年まつりで、全く久しぶりで原田溥君に会った。元気だった。嬉しかった。私に九大経済学部への扉を開けてくれた原田溥君に、改めて感謝するとともに、学問一筋、今や九大名誉教授の同君にエールを送り、稿を終える。

リレー随想

半生を振り返って



森 重厚氏

1959(昭和34)年卒

1. 九州大学在学時

教養課程は第2分校（久留米市小森野町）での寮生活から始まりました。入学当時は小森野橋が流されており、渡し船で筑後川を渡って行きました。ここで泳いだら日本住血吸虫にやられるよと注意されたことを覚えています（福岡県では2000年に終結宣言が出ていますのでその心配はなくなりました）。

第2分校は7カ月で終わり、あとの期間は六本松（寮は田島寮）でした。箱崎に移ってからは、法文系ビルにお世話になりました。講義は貨幣論・金融論の岡橋保先生、経営学の馬場克三先生、統計学の高橋正雄先生方にお世話になりました。ゼミは高橋先生でした。

小・中学の頃海で泳いだ経験もあって水泳部に入学しました。当時酒井清行氏（経済、32年卒）がおられ、自由形は抜群に速く、よく教えてもらいました。同期には今は故人となりましたが、三原淳雄氏（経済、34年卒）がマネージャーとして全体をよく見ており、プール横の部室でキャプテンの稲石禮

次郎氏（法、35年卒）をはじめ部員の皆さんと楽しいときを過しました。大会前の合宿の時には真夜中に薄暗い電灯の明かりの下で泳いだこともあり、そのときは流石に「うるさいぞ!!」と近くの寮生からクレームがあったりしました。

2. 社会人となって

昭和34年に卒業して損害保険の会社に就職しました。赴任地は福岡でしたが、そこで2年間、経理・庶務等の仕事に携わった後、鹿児島営業所に転勤し営業の仕事に代りました。地域的には大隅半島一円を担当しました。当時お得意先や担当代理店を訪問する際はいつもスクーターでした。ただ、地方を走るときには舗装道路は少なく、四輪車の後を走るとすごい砂ぼこりに悩まされました。大隅半島に行くときは、帽子、サングラス、合羽、おしぼりは必需品で、代理店やお客様のところに着いたら、合羽を脱ぎ、おしぼりで顔をよく拭いて訪問するようにしていました。また、バラス道はスクーターで走ると不安定で最初の頃はよく転倒しました。2年ほどして軽四輪乗用車が配車となって上記の環境は大幅に改善されました。

その後東京本社に転勤となり、昭和44年4月に発売された長期総合保険（保険期間は10年）について体験した思い出がいつまでも心に残っています。それまで損害保険は保険期間1年、掛け捨てが基本であり、長期保険特約として保険期間2年もしくは3年の契約も可能でしたが、保険料は一括払いの掛け捨てが前提となっていました（一部の会社では例外もありましたが）。長期総合保険では保険期間10年、満期返戻金付、配当金あり、保険料も一時払い、年払い、半年払い、月払い、団体扱いの5種類があり、保険料の計算式も年金現価の要素を加味して複利計算が織り込まれています。また、事前に収支予測等の試算を行い配当金の推移なども計算しました。当時は現在のようにExcelもなく、タイガー計算機やフリーデン電算機を使って若い担当者数人で手分けしながら苦勞したことを思い出します。生命保険業界では元来長期の保険が前提なので保険数理に明るいアクチュアリー（保険計理人）が活躍しています。損害保険業界でも長期総合保険発売を機にアクチュアリーの育成・強化が図られました。

長期総合保険の発売前は私もまだ30歳台前半でしたので、高校時代の数学の本、教養課程の一般数学のテキストなどを復習したり、生命保険の数理の本を読むなど、仕事に関連していただけに、興味を持って長期の保険の勉強ができました。

3. 九州大学経済学部同窓会東京支部

平成14年度から事務局担当として支部役員となりました。翌年度から平成19年度まで事務局長を務めました。14・15年度の支部長は有吉孝一氏、16～19年度は荒木千寿氏（残念ながら現在は鬼籍に入られました）でした。15年度の総会参加者は来賓を含めて約150名で私が経験した中では最も多い人数でした。全学部横断の九州大学東京同窓会の検討も15年度に本格的な詰めがなされ、16年度からスタートしました。16・17年度は若手理事のイニシャティブでパワーランチ（先輩を囲む勉強会）を実施したことなどいい思い出となっています。

七夕総会や全学部の東京同窓会に参加して思うことは、いつもいろんな方とお会いして勉強になったこと、そして、元気をもたらしたことなどです。できれば多くの若い人達にも是非参加してほしいと思います。

4. 近況（ふるさと応援活動）

私の生まれ故郷は鹿児島県南さつま市坊津町です。平成17年の市町村合併で1市4町（旧加世田市、金峰町、大浦町、笠沙町、坊津町）が合併し、南さつま市となりました。関東地区一円に居住している坊津町出身者は約600名です。昭和61年に会員相互の親睦とふるさととの交流を図るべく「関東坊津会」が結成され、会報の発行、総会・懇親会の開催（年1回）等の活動を行っています。一方、南さつま市施行後各地区ふるさと会の連合体として、同様の趣旨で平成22年に「南さつま市関東ふるさと会」がスタートしました。現在、「関東坊津会」と「南さつま市関東ふるさと会」は隔年交代でそれぞれの総会・懇親会を開催しています。

坊津町には坊、泊、久志、秋目という風光に恵まれた四つの浦があります。坊津町は古代から港町として生き続けてきました。遣唐使（630～894年）の中期頃、南島路を使うようになって、唐の国との発着の玄関口となっていました。753年12月20日、唐の高僧鑑真が過去5回の渡航失敗にもめげず、6回目に坊津町秋目浦に着き、大宰府を経由して大和の奈良に入りました。当時鑑真は66歳の高齢で両眼を失明していました。鑑真は直ちに戒律の伝授を行い、759年には唐招提寺を創建し、仏教のほか美術工芸、建築、医薬など日本の文化に多大な影響を与えたことは周知のとおりです。坊津は遣唐使廃止後も宋、明との交易が続き、明の文書（武備誌）には筑前の博多津、伊勢の安濃津、薩摩の坊津が日本三津と位置づけられていました。

平安の末期には坊津は近衛家の荘園となっていました。南北朝から室町の頃には北九州、壱岐、対馬、松浦、肥前の五島、坊津など倭寇の本拠地として活動していた時期もありました。また、薩摩藩藩主の庇護を受けて琉球貿易にも力を注いでいましたが、江戸時代の鎖国政策（1639年）により外国との交易はできなくなり、死活問題となりました。生きるため抜荷（密貿易）をせざるを得ず、薩摩藩も見てぬめふりのところもあって、海商と呼ばれる人たちが蔵を建て、大きな富を得ました。蔵は現在残っていませんが、密貿易屋敷は現存しています（倉浜荘）。ところが、享保8年（1723年）「唐物崩れ」と呼ばれる幕府の一斉手入れが行われ、一夜にして坊津は寒村と化しました。この後は華やかな貿易港としての時代に幕を降ろしましたが、幕末に向かって海への活動は息を吹き返しました。

明治になってかつお漁業が盛んになり、私が高校生の頃は大型かつお船が15隻くらいは有り、威容を誇っていました。しかし、残念ながら現在は沿岸漁業の漁船のみが活動しています。当時、坊津町の人口は約13,200人でしたが、現在は約3,400人です。

坊津の歴史に関し、一乗院のことも触れなければなりません。583年百済に仕えていた日本人の日羅というお坊さんが龍巖寺（一乗院）を創建したといわれています。平安時代1133年に鳥羽上皇が院宣を下し、一乗院の称号を賜るとあります。また、室町時代に後奈良天皇の勅願寺となり、薩摩藩藩主の保護の下に隆盛を極めたとあります。しかし、明治2年の廃仏毀釈によって廃寺となってしまいました。一乗院にあった多くの宝物、文化財はほとんどが散逸していますが、八相涅槃図をはじめ仏画、彫刻、陶器などの一部が坊津歴史資料センター「輝津館」に保存されています。なお、前述した鑑真和上についても、秋目浦にある「鑑真記念館」に坐像他多くの資料が展示されています。

南さつま市になって、坊津町と笠沙町の海岸線一帯がリアス式海岸に恵まれており、風光明媚なところが多く、「南さつま海道八景」として史と景を楽しむことができます。また、日本三大砂丘の一つ、吹上浜の一角では毎年5月に「砂の祭典」が盛大に執り行われています。この時期は延べ17～8万人の人出で賑わいます。南さつま市は今年10年目を迎えますが、「健康元気都市 南さつま」を目指して、農業・漁業等の産業づくり、歴史と景色に因んだ活動、安心安全な暮らしを守る環境づくりなど地域特性も加味しつつ日々活動が展開されています。

我国では少子・高齢化と過疎化の問題の解決が大きな課題となっています。日本のいたるところで「町おこし」の取組も行われていますが、我国をどのように活性化していくのか、国・地方自治体・企業ならびに住民を含めた努力がますます重要になると思います。現在、安倍政権でも「地方創生」をテーマに取組がなされていますが、私も応援団の一員として、ふるさとの今後の動きを見守ってゆきたいと思っています。

リレー随想

福岡に住んで45年



株式会社エフエム福岡 専務取締役

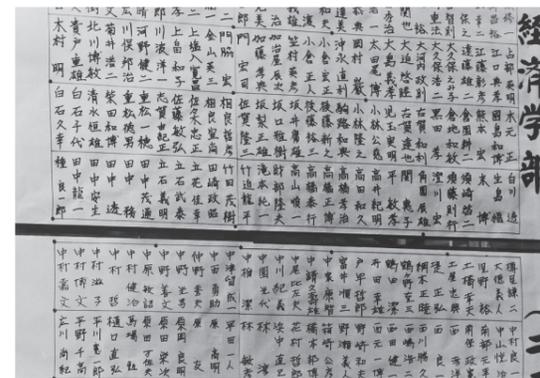
箱崎 公彦氏

1976(昭和51)年卒

大分県の南、「佐伯市」から2月に受験のため、初めて福岡にきた時の印象は“ちょっと「暗い街」だな”という感じだった。

その理由は冬の日本海側特有のどんよりとした低い雲と、その当時の電車やバスの車体の色が暗かったせいかもしれない（茶色と小豆色）。「佐伯」は太平洋側で、空が高く明るい。バスの色は白にブルーだった。そんな佐伯の色のイメージが、私に福岡の街を暗いと思わせたのだろう。

その街に大学時代から住んで、そのまま福岡のラジオ局「FM福岡」に就職し、やがて45年になるとしている。冬の日本海側の天気は変わらないにしても、バスや電車のカラーは新しく明るくなり、街も随分と賑やかになった。食べ物は相変わらず安くておいしい。今となっては良い街に住むことができたと思っている。



昭和46年合格発表

昭和46年に入学した我々が、国立大学の入学金1万円、年学費1万2千円の最後の学年となった。翌年から学費が3倍となるというので、学内では学費値上げ反対運動が巻き起こった。そのため授業もあまり行われなかった記憶がある。たとえ授業が行われていたとしても、アルバイトやパチンコ、麻雀などに熱が入っていた時期だったので、出欠を取られる授業や試験がある時以外はあまり学校に行かなかったような気がする。（ちなみに現在は入学金28万2千円、年学費53万5千8百円だそうだ）。

教養部の正門前の道路で学生によるジグザグデモが行われ、先導した学部の先輩が警察に連れていかれた。その後裁判になったとは聞いたが詳しいことは私は知らない。

六本松の食堂で、客の一人から「お前達は国のお金で学校に行かせてもらっているにも関わらず、勉強もせず、交通渋滞を引き起こし、俺たちの仕事の邪魔をしている」と怒られた。学生は何にもとられず自由に行動ができる。だから学生の話にも耳を傾けてほしいと反論したが…。

最近、大学の同窓会に出席するようになった。年齢も60歳を越え、仕事の区切りがつき始める時期に差し掛かったからだろう。留年して卒業が遅れたこともあり、以前は連絡すらあまり取っていなかったが、久しぶりに会うと学生時代の話に花が咲く。

最近のリレー随筆に登場している経済学部L1-11の「健人会」は頻繁に活動している。それ以外にもサークルの集まりなど、私はここ1年に正式の同窓会ではないが数回飲み会に参加した。

先日新たに「九州大学福岡マスコミ会」が初めて開かれ、40名を超える大きな集まりとなった。その場では最長老として指名され挨拶をした。九大出身の方々がこの業界にこんなたくさんいるとは思わなかった。特に九大出身者はあまり群れ集うのは得意でなく、どちらかというに一匹狼的なひとが多いのではないかという見方もあったが、昨今は変わってきたのかもしれない。また出身学部をみると文科系の方が大半だが、工学部の方や芸術工学部の方々も多く目立った。

大学時代はほとんど学校には行かず、映画を年に100～200本位観ていた。サークルは映画研究部に所属し、学生会館で上映会をよくやっていた。ヤクザ映画から日活ロマンポルノ、ヨーロッパの名画から左翼系の映画まで種々雑多。上映会後の打ち上げが楽しかったただけなのでは?! という話もある。映画研ならどんな映画を創ったのかと聞かれるが、僕ら



映画同窓会（平成25年開催）
左から真田さん、今橋さん、
原さん、村瀬さん、清田さん、
箱崎

の時代は映画製作をやるという世代ではなかった。

そんな学生時代にAMラジオに出演したり、新聞・雑誌に投稿したり、コンサートのアルバイトをやったりしていたのが、今の仕事に多少繋がっているのかもしれない。

4年でストレートに卒業された方々の多くは、日本を代表する大きな企業に就職をしたと思う。一年遅れて昭和51年卒になると第1次オイルショック（昭和48年～50年）の影響もあって就職状況は厳しくなった。わずか1年でこんなにも変わるのかと驚いた。私自身は福岡を離れずに、少しでもエンタテインメントに携われる仕事ができれば…と考えていたので、求人があったFM福岡（会社設立5年）に入社した。その結果は私にとってよかったのかもしれない。

入社してローカルラジオの広告を集める営業を5年、その後東京支社で5年、戻ってきてイベント事業を5年、編成、開発を3年、そして東京支社長を5年と総務・技術以外の仕事はほとんど経験したことになる。いまは福岡本社で全般をみている。

マスメディア業界がインターネットなどの登場で厳しくなっている中、FMラジオが今後どのように生き残っていくのかという難しい選択を迫られている。

映画業界や音楽業界の変貌を目の当たりにして、電波・広告業界も大きく変わろうとしている。テレビがデジタル化した中で空いた電波の帯域を使って、マルチメディア放送という新しい電波の使い方を提案して、より多くの方に電波を利用していただくという趣旨である。音声だけでなくパソコンなどで送れるデータや動画も放送の電波を使って一斉に送信しようという仕掛けである。

今までの放送局は川上から川下まですべてを担っていたが、これからはハード・ソフトの分離、コンテンツの直送など放送の在り方にも変化がおりつつある。

どの業界も時代の動きに合わせて、変化していか

なければならぬ。そしてまた、若い人たちに引き継いでいかなければいけない。今その難しい仕事を最後にやっている。

リレー随想

木下先生への感謝の気持ち



開発肥料(株) 専務取締役

松野下 正秀氏

1978(昭和53)年卒

九州大学経済学部を昭和53年に卒業して早いもので37年が経ちます。(この卒業年次は今年多くが還暦を迎える羊年です。私は申年の早生まれですが。)

教養部・経済学部時代を通して唯一自発的かつ能動的に通ったのが恩師木下悦二先生の教室、ゼミナールでした。世界経済論の木下ゼミは人気があり、選抜があるのかどうか不安だったのですが、足切りもなく無事にすんなり入ることができ、感謝いたしております。経済学部では、箱崎キャンパスのみならずゼミ合宿で湯布院、パワースポットの高千穂峡、壱岐等等とテーマが何だったかまでは覚えていないのですが（先生、すみません）、様々な場面での夜の活動に少なからず活躍したことをかすかに覚えている次第であります。こうした思い出深い合宿を含め楽しくかつ厳しくご指導をいただきました。

木下先生におかれましては、関西弁から醸し出されるあの口調に先生特有のウィットを時折交えた会話等を通し、先生の奥行きの高さ、柔らかさを強く感じたとともに、色褪せることのない研究への揺るぎない姿勢・探究心等まさに人生のお手本であります。

先生には、私たち夫婦にとって特に感慨深い、忘れえないこととして、人生で最も輝いていたであろう華燭の典において、仲人をお引き受けいただきました。鹿児島県薩摩半島の南の果て我がふるさと「枕崎」、JR指宿枕崎線の終着駅、かつおと台風銀座として名を馳せた、当時人口約3万人の枕崎に結婚式のため、もちろん初めて足を踏み入れると言われていましたが、遠路はるばる奥様とご一緒においでいただきました。誠にありがとうございました。ほんとに遠くて、そして街全体がかつお節の燻製の独特の臭いに驚かれたことでしょう。

いお言葉。私にとって印象的で、これはリップサービスではなく真に先生がお感じになった言葉だと信じております、信じたいです。

先生とは、その後論文の上梓記念ということで先輩諸氏のお取り計らいで東京で2度ほどお目にかかる機会がありましたが、最近では季節のお伺いを含め年賀状を中心としたお付き合いとなっております。有り難くも今年も年賀状をいただきました。御年94歳、ますます意気軒昂にこう結んでありました。「激動する世界経済を追い続けたい」。常にぶれずに探究を続けられる姿勢に頭が下がる思いであります。近々還暦を迎える我々としてみれば、先生の現役のあのころに勝るとも劣らない学問に対する探究心に、しっかりしなければと背筋をぴんと伸ばさずにはおられません。(力をいただいている気がします。)

木下先生そして奥様におかれましては、お体ご自愛のうえ、これからもお元気にお過ごしいただき、引き続き私ども卒業生に無言の檄をご発信いただければと心から願うものであります。

リレー随想

九大入学から卒業そして同窓会



美和ロック株式会社

川原 晃氏

1979(昭和54)年卒

九大入学前

私は1954年（昭和29年）に佐賀県多久市で生まれました。あまり知られていませんが、皇后美智子様のお母様の生家（副島家）が近くにあります。副島家はかつて佐賀藩多久領の家臣で石炭採掘ほかの事業を行っていたため、多くの関連書物が多久市立図書館に寄贈されており、九大経済学部の秀村選三先生も貴重な資料ということで研究されていたようです。

私の父は明治時代に肥前の炭鉱王といわれた高取伊好さんの奨学金を得て旧制佐賀工業学校を卒業し、関西の電力会社のエンジニアとして朝鮮半島の漢江で巨大な発電所の建設に従事していました。今の韓国は反日一辺倒のような感じですが、当時の日本政府は京城に帝国大学を作るなど教育改革やインフラの整備を行い朝鮮半島の発展のため国力を割いたと聞いています。父はその後中国に出征し野戦砲兵部



仲人の木下悦二先生ご夫妻と

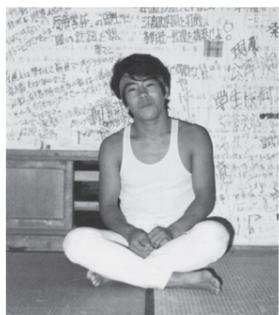
隊で転戦したそうですが、終戦となって帰国しました。

父母は生まれ故郷の多久に戻って、これからは農業だという考えのもと政府の開拓事業の推奨により原野を切り開く開拓農民となりました。当時ブルドーザーのような機械もなく原野をすべて手で開墾しなければならず大変な苦勞をして農作物を作っていました。政府の推奨で畑にはみかんを植えて貧乏ながらも少しずつ収入が安定するようになりました。我が家ではお金がないからしっかり勉強して国立大学に行けといつも父に言われていました。

私が小学五年生の時に兄は工学部電子工学科に入学していて私を九大見学に連れて行ってくれました。はじめて目の当たりにした九大に私は強烈な印象を覚えました。とにかく田舎者です。福岡に出てきたとたん路面電車が走っているのを見て「道の上を電車が走ると」と驚きました（もっともその後上京した時は道の下を電車が走っているのを見てさらに驚きましたが）。兄と私は六本松から箱崎の工学部、そして医学部のキャンパスをみて回りました。どのキャンパスも立派でアカデミックでとても印象的でした。福岡から帰ってしばらくして、箱崎に建築中の電算センターに米軍のファントム戦闘機が激突し銃を構えた米軍のMPが電算センターを取り囲んだ話やそれに抗議して九大学長を先頭に抗議デモが大規模に行われたこと、エンタープライズ反対運動では仲間の学生とトラックの下に角材を隠して佐世保へ行ったことなど兄がいろいろ話してくれました。そういうこともあって自分は小学生ながらその時すでに九大に行く決めていました。こんな小さいときに進学先を決めてしまう子供なんて普通いなと思います。

九大入学後

入学してからは田島寮と松原寮で寮生活を送りました。田島寮では入寮したその日に中核派と書いた白いヘルメットのデモ隊が寮に来て早くも学生運動の洗礼を受けました。



旧田島寮E4右に住んでいた頃 (昭和50年)



真ん中が芹洋子さんで筆者は左端

で死んでしまって親の気持ちがわかっているのだろうかと心からそう思いました。

寮での寮祭やストームのことは諸先輩がこのリレー随想で書かれていますので割愛しますが、合コンや合ハイ（合ハイ＝合同ハイキングは今や完全に死語ですね）ソフトボール大会などいろんなイベントがありました。寮の職員だった平山さん（女性）は寮生のことをいろいろと世話してくれましたし、寮の整備もやってもらっていた教養部の職員さんのチームからよく寮生に声がかかって一緒にソフトボールの試合をしていました。

昭和51年だったと思いますが寮で行った行事に芹洋子さんにきていただいたことがあります。芹洋子さんの「坊がつる讃歌」はもともと広島大学山岳部の歌だったのを、九大山岳部の三人が替歌にしたものを芹洋子さんがNHKで歌い、それが全国的に有名になったという話を最近知りました。

またこの頃寮に大きい犬が住みついて寮生でその犬に「こまわり君」という名前をつけて寮生が部屋で炊いたご飯を交代であげていました。朝学校に行くときは寮生の誰かについて教養部に行き、夕方には寮生の誰かと一緒に寮に帰ってくるというゆったりした日々が続きました。そうした中私は51年に田島寮の寮長になったのですが、その任期が終わってから田島寮の建替えが決定しました。私たちの世代が学部に進学し松原寮に移ってから田島寮は全個室の現代的な寮に生まれ変わりましたが、そこには私たちも“こまわり君”も住めなかったことが心残りでした。

時は移って学部への進学後の昭和53年松原寮のときに「皇帝のいない八月」の撮影が福岡市内で行なわれ吉村さんという寮の先輩に誘われてエキストラで撮影に参加させていただきました。博多駅と緑橋での撮影がメインでしたが、吉永小百合さんが博多駅構内で撮影したときはあつという間に人だかりができて撮影になりません。見学の人だかりができると



最後の寮委員会 (前列左から3番目が筆者)

すぐに山本薩夫監督が撮影をストップするのでスタッフはその都度駅の構内の喫茶店でお茶を飲みながら待機することになりました。通行人役をしていた私と私の友人の女性と二人で先に構内の喫茶コーナーに入ってテーブルに座っていたのですが、なんとその同じテーブルに吉永小百合さんと永島敏行氏の二人が座ってきたのでさすがにビックリ。目の前にあの女優がと緊張しましたが、吉永さんにはいろんな話をさせていただきました。あれだけの女優なのに私たちに対してものすごく気さくに丁寧に話しかけてくれて、一緒にコーヒーを飲んで本当に嬉しくて一生の思い出になりましたね。ついでに握手もしていただき感動のあまり暫くはその手を洗えませんでした。緑橋では三国連太郎さんも迫力ある演技をやられていましたが、やっぱり自分の記憶のほとんどは吉永小百合さんが占めています。(写真撮っておけばよかったな)。(ほんとですな——編集部)。

ゼミと就職

学部進学にあたりどの先生のゼミにするかを寮の先輩で現在経済学部にて教鞭を取られている遠藤先



上:新寮 下:旧寮



輩に相談したところ深町先生のゼミにいけと言われて先生の了解もとらずにいきなりゼミに参加したので「お前は誰だ？」と深町先生に睨まれました。怖い先生でしたが情が深く酒も大好きな先生でゼミ生に慕われていました。九重でのゼミ合宿も大変楽しい思い出です。私は大学時代に大型バイクに乗っていて深町先生のお宅へも時々バイクでお邪魔していたので深町先生から「大きなバイクの人」と家でよく話題になっていたと伺いました。逢坂先生のゼミにもよく顔を出して大野城市のご自宅にも皆でお邪魔したりしていました。勉強が大好きだったわけでもないのですが、先生方やゼミの仲間と時間を共有するのが好きだったのだと思いますね。就職は深町先生に心配していただき工学部建築学科教授から紹介された今の勤務先である美和ロックに就職しました。深町先生の瑞宝中経賞受賞の連絡を受けた時には自分が大好きな新潟の日本酒のメ張鶴の一番高いセットを新潟から取り寄せてお祝いに送らせていただきました。

経済学部同窓会東京支部

東京支部の事務局長の吉元先輩が寮の先輩でした。また、当時の東京支部長の荒木先輩が会長をされていた岩崎電気の本社が私の会社の目の前でしたから荒木先輩にはよくお会いしていました。吉元先輩や荒木先輩に同窓会に来るようにと声をかけていただきそれから同窓会に出るようになり、5年ほど前に東京支部の理事になりました。東京支部は荒木元支部長から池田前支部長（元アサヒビール会長）へ、さらに昨年初井支部長（元日本ユニシス会長、現NHK会長）へと引き継がれました。理事会もこの数年でたくさんの若い人に理事として加わってもらいました。そしていまその若い理事たちが新人歓迎会や同窓会のために頑張っています。九大での学位記授与式や卒業祝賀会にも毎年参加させてもらい同窓会東京支部の案内もさせてもらっています。また経済学部同窓会本部はもちろんのことゼミの先生方にもご協力をいただいて在学の学生たちとの交流が深

まっています。去年は鷺崎先生とゼミ生が研修を兼ねて上京し、若手理事を中心とした先輩たちと懇親会を持つなど有意義な時間を共有することができました。これからも引き

続き関東地区に就職する卒業生には機会があることに同窓会への参加を呼び掛けていきたいと思っていますので、今後も関係の皆様にご協力をいただきますようあらためてよろしくお願い致します。

リレー随想

グローバル事業の最前線より



日本電信電話株式会社取締役

奥野 恒久氏

1983(昭和58)年卒

昭和58年卒業の奥野と申します。数カ月前に関先生から、本会報誌への寄稿のお話をいただきました。関源太郎先生とは一回りの年の差で、私たちは関ゼミの2回生にあたります。その風貌と物の言われ方から、当時は、先生というよりは、兄貴分という印象でした。勉強の中身はあまり覚えていませんが、萩に合宿に行ったり、レポートについてほめていただいたこと(一度ですが)等、なぜか覚えてます。昭和58年に当時の電電公社に入社しました。入社面接試験の前に先生のお宅にお邪魔して、お話を伺ったこともありました。

本稿で何を書こうかと考えましたが、ここは思い切って、関先生をはじめ同窓の諸兄に仕事の近況ご報告、ということで書き進めることにします。

私は現在、NTT(持株会社)のグローバルビジネス推進室という部署にいます。8年前に、当時のNTT社長(現会長)が、就任会見で、グローバルビジネスをNTTのビジネスの柱の一つにすることにチャレンジする、とコメントしました。NTTは、2000年前後に海外進出を図ったものの、グループ全体で1兆円を超える減損という、高い授業料を払う結果となりました。その後、7年を経て、「反省はするが躊躇はしない」との方針。当時、NTTコミュニケーションズという会社の経営企画部にいた私は、日本企業のグローバル化は避けて通れないにしても、NTTのようなドメスティック企業が、グローバルビジネスを事業の柱の一つにすること、それをサステイナブルにすることの難しさは、理解していたつもりです。ところが、その1カ月後の転勤で、自らこの経営課題にチャレンジすることになったのです。

NTTの持株会社は純粋持株会社で、事業は各子

会社が行っています。最初に考えたことは、持株会社として何をやるか。マーケットから遠いところで机上の空論を述べるだけでは、うまくいきません。一方、グループ各社がばらばらでも、グローバルマーケットで競争に勝てると思えません。そこで、まずは、グループトータルでのビジネスの方向を示し、グループ各社と議論し認識を共有しました。同時に、5年後の売上高目標を1兆円と設定しました。2007年当時のグローバルビジネスの売上高は、グループ各社合計で2000億円程度。グループ全体の売上高10兆円の2%に過ぎません。1兆円になると、グループの売上高の1割に達しますし、グローバルマーケットでのプレゼンスも、ある程度上がると考えたからです。その実現に向けて最も欠けていたものは、非日系の顧客基盤であり、マネジメントの力でした。そのためには、M&Aが必要でした。

2010年、2年を超える交渉を経て、ディメンジョンデータという会社を、2860億円で買収しました。この会社を買収した背景は以下の通りです。まずは、グローバルビジネス1兆円に向けて、コアになる会社を買収したかったこと。小規模のM&Aを積み上げていいのですが、この場合、買収後のマネジメント(PMI)が非常に煩瑣になります。また、このコアになる会社は、NTTと事業シナジーがあるとともに、黒字基調であることが必要です。過去の経験から、NTTのようにグローバルにリソースを多く持たない企業にとって、赤字からの黒字転換は容易ではないと考えたからです。そして、最も大切なことは、買収後のビジョンが共有できるかどうか、マネジメント間の信頼が築けるかどうか、ということ。

ディメンジョンデータは、グローバルにITリソースの設置やオペレーションを行う企業で、事業運営は順調であり「FOR SALE」ではありませんでした。そこで、こちらからドアノックし、先方のマネジメントに、我々の考え方、すなわち、5年後にどうなりたいのか、一緒になることで、社員にとって、クライアントにとって、何がエキサイティングなのかについて、徹底的に話し合いました。紆余曲折はありましたが、2010年、株主との交渉を経て買収にこぎつけました。2014年度のNTTのグローバル事業の売上高は約1兆5千億円の見込み、そのうち半分は、ディメンジョンデータによるものです。買収後もディメンジョンデータのCEOとは、案件の有無にかかわらず、毎週ビデオ会議でコミュニケーションを図っています。

ディメンジョンデータは、現在NTTグループのグローバルビジネスのコアとなっています。が、買収以前から黒字基調ということは、何もしなければ、そのビジネスモデルはいずれ陳腐化するということを意味します。そこで、2007年以降、コアとなる企業のM&A(=ディメンジョンデータ)と並行して、シリコンバレーを中心としたベンチャー企業との協業や買収にも取り組んできました。こうしたベンチャー企業や、NTTグループ各社、2013年に設立したシリコンバレーのR&D拠点との協業によるグループ全体での更なる付加価値の向上が、現在私が取り組んでいる大きな課題です。

現在の部署に来て、8年目になりますが、退屈に感じる暇はありません。日々、次の打ち手を自分の頭で考え、海外を中心としたグループ各社と議論し、チャレンジしています。今後、グローバル事業をNTTグループの収益の柱の一つにできるかどうか、これから数年間勝負だと考えています。与えられたチャンスに感謝しながら、このチャレンジを楽しみたいと思います。

リレー随想

Music in my Life



三井住友海上火災保険株式会社

宮崎 誠二氏

1988(昭和63)年卒

経済学部同窓会東京支部総会の二次会にて、思いがけず福留久大先生より本会報への寄稿についてお話を頂きました。同窓会では、いつも「松原に」を指揮している変なおじさん、と思われているのですが、ろくに大学に通わなかった不肖の学生にこのような機会があるとは、卒業したときには夢にも思わなかったことです。有り難いお話と承諾したものの、いざ原稿を書き出してみると、これは案外大変なことだ、と自分の軽薄を恥じております。

私は、昭和40年に五島列島の最北端の島、宇久島に生まれました。今も両親は島に居住しています。すっかり高齢化が進み、産業労働力の減少と共に、島には活気が失われてしまいましたが、私の生まれた年の人口は今の4倍、1万人を超えていて、同級

生も80人を超えていました。

そんな小島で勉強ができる真面目な少年は、周囲からさんざん「九大」の名前を聞かされ、九大に行くことを使命のように感じたものでした。何せ、島で聞かされた大学の名前と言えば、東大・京大・九大・長大。ある時期まで私は日本には4つしか大学がないのだと思っておりました。一方、周囲がうるさく期待をかける中、私の父は放任主義で、将来について話をしたことが一切なかったと思います。長崎中学で原爆の悲惨な光景を見た父が、我が子には自由に将来を選択してほしいと考えていたのだ、と気がついたのは、つい最近のことです。

そうして、私は周囲の期待通りコツコツと勉強し、九州大学に入学することになります。ただ、私は学問以上に自分が興味を引かれる世界があることに薄々気がついておりました。それは音楽の世界です。幼少時よりピアノを趣味とし、高校では合唱部の指揮をしていた私は、九大に入学すると先輩を慕ってコルアカデミーに入部します。そこで、プロの作曲家として活躍されていた九大出身の藤井凡大先生に出会いました。音楽の能力について自信を持っていた鼻っ柱の強い私は、そこでプロの所業を見てその凄まじさに驚愕しました。でも、絶対に追いつけない世界とも思えず、その業を吸収することに新たな興味がわきました。周囲が畏れる巨人に無鉄砲に挑む私は、鼻持ちならない学生だったに相違ありません。しかし、挑むと言っても所詮未熟な学生のもの。心の奥底で音楽の道を詮索していた4年生の私に、先生は「君は日本一のアマチュアになれるよ」という言葉で、私の能力不足を論じました。

私はこうして、大正海上火災保険(現三井住友海上火災保険)に入社し、東京でサラリーマン生活を始めることとなります。未熟な私は初めて社会の荒波に揉まれましたが、最初に赴任した部署にいた優れた上司(この上司は後に社長とされます)のおかげで、ようやく人並みの人間に成長させて頂くこととなります。サラリーマンとしての私の人生は、パツとしたものではありません。でも、転勤の多いこの会社で、2年に満たない大阪での生活を除けば本社部署で仕事を続けられたことは大変恵まれたことであつたと思います。そして、東京に長く住んでいたことで、再び音楽の道が開けていくことになるのです。

藤井先生が63歳という若さで逝去され、東京でOBの合唱団を結成しようとする動きが起りました。このとき、当時30歳であつた私に、合唱団のタクト

が渡されました。忙しいサラリーマンには定例の集まりは荷が重く、「たまに集まる合唱団」から「TAG」と名付けられた合唱団。たまの集まりとはいえ、多くの先輩を含むOBの指導的立場を拜命させて頂いたことで成長させて頂いた、と私は大変感謝しています。

そして39歳の時には九大出身の指揮者である荒谷俊治先生の指導される混声合唱団に副指揮者として迎えて頂き、43歳のときにコールアカデミー出身の同窓会東京支部の杉哲男副支部長の強いバックアップの下、コールアカデミーの55周年記念東京公演で自身の作曲した男声合唱作品を上演させて頂きました。その演奏を聴いて頂いた縁で、合唱指揮者のプロ集団である日本合唱指揮者協会にアマチュアの立場で参加させて頂くことになりました。図らずも藤井先生のおっしゃった「日本一のアマチュア」に、かなり近づくことができた、と思っています。

45歳を過ぎてからは、東京の音大に通う若い有望な音楽家を発掘し、共演しています。彼女らに演奏の機会を与えつつ、私達も音楽的成長を遂げることができ、男性しかいないステージに華やかさを添えてもらう、一石何鳥も得ることができる企画。昨年の演奏会では、九大出身のシンガーソングライター、深水郁さんにもご出演頂き、素敵なコンサートを行うことができました。そして最近では、共演した若手の音楽家の方よりヴァイオリン・チェロ・ピアノ三重奏の作品の提供を頼まれたり、一緒にコンサートを行った先生より合唱団の指導を依頼されたり、新たな出会いや発見のある日々を送っています。

自分の半生を振り返り、人より優れていたことが

あるとすれば、圧倒的に力の差のある人を前にしたときでも、そこで無理だと思わず、自分のペースで少しでも近づこうとし



TAG2014 アンコール

てきたことが挙げられるような気がします。実際、小さな気持ちの積み重ねが、長い時間の継続の中で思いがけない大きな果実になって現れることがあるのです。

今年、私も齢50の年輪を重ねることになりましたが、この年になっても新しい出会いに心躍らせることができることは幸せだと思います。でも、長い時間の中では、人生80年の50歳は、人生50年と言われた時代のわずか31.25歳に過ぎず、成人後の時間の半分しか過ごしていないことになるのですよね。そう思うと50歳からのこれからの時間の何と長いことか！

私はこれからも若々しく、優れた人の優れたものを吸収しながら、日々新しく過ごしていきたいと思っています。若いみなさん、未来は常に開かれていますよ。みなさんのご活躍を祈りつつこの原稿を結びたいと思います。

リレー随想

人間万事塞翁が馬



株式会社日本政策投資銀行

久間 敬介氏

1994(平成6)年卒

～まずは自己紹介～

みなさんこんにちは！

まずはじめに、自己紹介させ

てください。

私は、福岡県宗像市の出身、昭和46年生まれです。

幼い頃、当時福岡市内に通勤していた父親に向かって「お父さんと一緒に高校も大学も通学したい！」と話していたようで、父親からの答えが「それじゃ福岡高校、九州大学に行かないと」ということだったようです。(まあ、一番学費が安いコースを言っただけという話もありますが(笑))

その洗脳?の甲斐あってか、本当に幸運なことに、その通りのコースを歩むことができました。そして高校時代に何かの本で公認会計士のことを知り、それをきっかけに財務や会計に興味を持っていた私は経済学部を受験することになり、無事合格を果たして平成2年に入学しました。

～青春謳歌の六本松時代～

無事九大入学を果たしてからは、キャンパスライ

フを満喫するためにはサークルにも入りたいと思い、高校時代からやっていたテニスのサークルに入ろうと努力するものの、いかせんテニスサークル希望者が猛烈に多い時代、男性がサークル入りするのは選考もあり結構大変でした。そこで何とか入れたのが「オレンジロード」という新興テニスサークル。結果的には良い友人もたくさんできて楽しかったので、結果オーライでした。

今となっては既に面影も無くなってしまった六本松キャンパスでの楽しいキャンパスライフを過ごしながらも、将来のことを漠然と考えていました。

～将来を見据えた箱崎時代～

箱崎キャンパスに移ってから、将来を真面目に考えてみるようになりました。やはり初志貫徹ということで公認会計士の勉強をやってみよう、そしてまた社会人になっても勉強したことが役に立つようなゼミに入れればと思うようになっていました。

そこで入りたいと考えたのが丑山優教授のゼミでした。このゼミは優秀な人が多くかつ入るのが難しいという評判でしたが、有り難いことにゼミに入ることができました。

丑山ゼミには優秀な同級生、先輩後輩がいてとても刺激になりました。たとえば、一つ上には現教授の内田交謹さん、一つ下には現准教授の大坪稔さんなどがいて、ゼミでは活発な議論の中、鋭い指摘や、思いもよらない切り口・観点など、本当に勉強になりました。

そしてその傍ら公認会計士の勉強を続けていましたが、いわゆる就活シーズンに入ると企業からたくさんの会社案内が届くようになりました。その中でふと目にとまったのが、いわゆる長信銀や政府系銀行でした。

企業と長期的な目線で向き合い、更にファイナンス面からその事業を応援するというのは面白そうだなあといい、この業界で働けるなら今まで続けてきた公認会計士の勉強をやめても自分としては価値があるかなと考えるようになりました。



サークルで九大祭出店(本人中央)

今勤務している銀行(当時は日本開発銀行)や長信銀の面接も進んで行く中で、公認会計士の勉強を続けるか就職するかの岐路に立たされました。その際、丑山先生に相談したところ、「久間君は公認会計士の仕事をするより、いま考えている金融機関での仕事の方が活躍できると思うよ」とアドバイスしていただいたことで、今の道に進む決心ができました。結果としては間違っていなかったと思っており、今でも感謝しているところです。

～銀行員となってから～

日本開発銀行に入行すると、新人一年目は研修の連続でした。一番大変なのが、財務分析研修。数ヶ月にわたって一日中企業分析の基礎をたたき込まれます。ここでも九大の授業やゼミで学んだことが大いに活かしました。

その後、地元福岡での投融資業務、本店では経営企画部門や投融資部門など幅広く経験させてもらい、平成22年に12年ぶりの福岡勤務となり九州支店に赴任しました。企画調査という初めての経済リサーチ部門です。やったことのない仕事だったので不安でしたが、当時は九州新幹線全線開業を翌年に控えていたり、それに合わせた博多駅ビルの建て替えがあったりと、色々興味深いイベントがありました。

また、長年の東京生活から福岡に戻ってきて直感したこともレポートにまとめたりもしました。支店のある天神を歩いていると、若い女性だけのグループもしくは一人で歩いている割合が、東京で見かける割合より格段に多いなあと感じていました。また、支店の女性陣が「良い男性と出逢えない」と日頃から言っていたことも気になり、「これは何か人口問題等あるのかも？」と思い、人口関係の統計を調べてレポートにまとめたのが「若年男女人口比からみえる福岡市のすがた ～未婚率からみる福岡市の人口構造・課題～」です。(http://www.dbj.jp/investigate/area/kyusyu/index.html)

結果はなんと、福岡市は若年女性比率が政令指定都市でナンバーワン、かつ女性未婚率もトップという結果になったのです。これはマスコミ各社も興味を持ってきて、テレビや新聞各紙で取り上げられました。

また福岡は地方都市としては珍しく未だに人口が増えていてかつ若者が多く活気があります。しかし、数十年後の都市の姿を考えると、この未婚率の高さは今でも気になっています。

ぜひ皆さん、福岡の繁華街を歩く際には、そういう視点も持って他都市と比較してみてください。面

白と思いますよ。

そして今は、また本店に戻って広報業務を担当しています。これもまた面白い仕事で、いろんな取材を受けたり逆にネタを売り込んだりと、日々マスコミの方々との切った張ったのやりとりをしています。

～最後に～

九大で過ごした4年間で、社会人人生を歩むための教養、知識、物事に取り組む姿勢などの基礎体力をつけてもらいました。また、色々と悩んだ上で今の職業に進めたのも丑山先生のアドバイスがあったからでもあります。

それらのおかげで、社会人となって20年ちょっと、何とかここまで過ごすことができました。有り難い限りです。

自分でも、九大入学時は今のような仕事に就くとは思っていませんでしたが、私の座右の銘でもある「人間万事塞翁が馬」の結果でもあり、今はこれで良かったと思っています。

そして、地元九州・福岡でまたいつか勤務したいなあと思いつつ、これからも頑張っていきたいと思っています。



卒業祝賀会で丑山優先生をはさんで、左がゼミ同級生の武石君、右が筆者

リレー随想

九大生から書家へ



書道講師

山園 和彦氏

2004(平成16)年卒

この度、このような寄稿の機会を賜り、ありがとうございます。偉い方々に並び、小生が書いて良いのかと思ひ、恐縮していますが、折角の機会なので書かせて頂きます。

～大学生～

東福岡高等学校を卒業して九州大学経済学部に入りました。学生時代のことは大分忘れてしまいましたが、大学の講義もアルバイトもサークルも旅行などの遊びも、ずっと同じ大学の友人と一緒にだったことは印象に残っています。この時出会った友人とは今でもFacebook等で繋がっており、たまに集まっています。

アルバイトは、NHK福岡放送局の報道で編集の補助、福岡ドームでの中売り、コンビニの店員、工場でのライン作業など様々経験し、大学生にしてはかなり働き、稼いだと思います。そのお金は、サークル活動や旅行等に費やしました。サークルは、軟式野球に入りました。毎週末試合をしたり、たまに合宿に行ったりしていました。旅行は、全国各地、暇さえあれば大学の友人と行きました。東北以外の全都道府県をまわったと思います。現在フリーランスで仕事をしているのですが、初対面の方と出身地や勤務地の話をしたりする際、話のネタとして使え、大変助かっています。

～会社員～

就職活動にあたり自己分析をしても、やりたい業種、職種が定まりませんでした。取り敢えず社員を経験した方が良いと言われ、大学の求人掲示板で見つけた東京に本社のある取次会社（出版物の卸売業）に就職しました。

入社と同時に上京しましたが、配属されたのは本社ではなく、物流センターのようなところでした。朝から晩まで倉庫で派遣の方に混ざって単純肉体労働の本のピッキングをしていました。今思えば、現場の仕事を経験させる、体力を付けさせることが、人事部の目的だったのでしょうか、会社の同期や大学の友人たちと仕事内容を比べると非常に落ち込んだことを覚えています。

数年経ち、本社の経理部に異動になりました。資金繰り、資金運用、損益分析、予算編成等、経営判断に直結するような仕事をしました。会社の仕組みを大分勉強させてもらいました。

～書家～

たまたま入った本屋で、とある書家の字の美しさに衝撃を受けました。やりたいこととかやるべきこと（書道）が見つかった私はすぐに会社を辞めて書道に注力しました。当てもコネもなかったのに、当然仕事はありませんでした。ほぼ書道初心者だったので、暫くは腕を磨くことに専念しようと、一日中、筆を持って基礎練習をしていました。当時の字

を見るとこれでよく書家を目指したなあと思うぐらい下手くそでしたが、今ではその基礎練習が財産となり、自信へと繋がっています。お金は当然なくなりましたが、毎日何時間もの練習は必須で書道の仕事も不定期だったので、定職には就かず、きつい、汚い、危険な日雇い労働に励みました。自分で道を選んでおきながら、他人の人生と比べて、自分はこれでいいのだろうかと思ひました。

しかし、時は経ち今では、東京のカルチャースクール等で書道の先生をやりながら、本を執筆したり、書道展を開催したりしています。

～最後に～

まだ何も成していない未熟な私に、このような寄稿の機会を与えて頂き、関係者の方に御礼申し上げます。最後まで読んで下さりありがとうございます。

リレー随想

27歳からの学生生活



株式会社タカギ

山口 裕之氏

2013(平成25)年卒

2013年3月に経済学部経済工学科を卒業致しました山口裕之と申します。この度は、ゼミの恩師である磯谷先生から同窓会報第58号の「リレー随想」に投稿の機会を頂きましたので、私の学生時代を振り返りたいと思います。

(九大入学に至るまで)

私は元々、医師になることを目指し、9年間の浪人生活を過ごしました。医師になることを諦め、自分が進むべき道について悩んだ時、「世の中の事を様々な角度から学ぶことが出来るかもしれない」という思いで経済学部への思いを馳せ、理系でも受験可能である経済工学科を受験し、入学するに至りました。27歳にしてようやく訪れた春でした。

(大学時代を振り返って)

27歳で大学に入学する運びとなりましたが、学生生活に抱く思いは、正直に申しますと期待よりも不安の方が遥かに大きいものがありました。入学式が終わり、経済学部のオリエンテーションが行われた箱崎キャンパスに不安な気持ちを抱きながら向かっ

たことを、今でも鮮明に覚えています。

入学して間もなくクラスの集まりがあり、私はコンパレクというクラスのイベント係の担当を自ら名乗り出ました。様々な企画の幹事をする中で、クラスメイトと連絡をとるようになり、皆と慣れ親しむには時間はかかりませんでした。コンパレクを担当したことが、私の学生生活を有意義なものにしてくれたと言っても過言ではありません。

大学生活では、初めて海外留学を経験しました。第二外国語は韓国語を選択していたのですが、大学1年時の春休みに韓国の延世大学に短期語学留学の応募があり、学内選抜に合格し留学することとなりました。留学先では、延世大学の学生が言語パートナーとして準備されていました。年齢は私より3歳年下で、統計学を学んでいる大学院生でした。彼は日本語を全く話せず、私も韓国語はほとんど話せないという状況でしたので、お互いのコミュニケーションは英語で行いました。お互い積極的に交流を重ねるために、彼とは毎晩食事の場を設けました。食事の場では、現地の学生や知人などを彼が紹介してくれたことで、交流の幅が広がりました。休日には、彼の家族と交流し、一緒に観劇や名所観光を行なうなど、多くの現地文化に触れることができ、大変貴重な経験となりました。帰国後は彼が初めて日本に遊びに来てくれるなど、現在も交流を重ねています。

大学3年の夏休みには、タイで海外インターン活動を1カ月行い、「バンコク週報」という現地の日本人向け新聞社で、記者として記事を書きました。取材対象は現地進出している日本企業とし、取材の段取りから原稿を書き上げるまで慣れない作業で色々大変なこともありましたが。この経験を通じて「やり遂げるといふ強い思いがあれば、どんなことでも必ず達成出来る」ということを学びました。このことは、現在、仕事を行う上で、心の大きな支えとなっています。

(社会人生活)

現在、私は北九州に本社を置く「(株)タカギ」という主に蛇口一体型浄水器、散水用品の製造・販売を行っている会社に勤めております。入社後、最初の配属は経理部となりました。経理部での在籍時は、資金繰りおよび銀行対応業務を担当させて頂きました。経営状況を数字で把握することは、知識と時間を要するものでしたが、実り多いものとなりました。また、2014年10月より東京にある営業管理部という部署に異動になりました。新たな部署では、

実際に資金を投入し製造した製品がどのようにして利益を生んでいるのかなどの売上分析を行い、改善策の提案等を行う業務に携わっています。以前所属していた経理部よりも、営業活動に身近に触れることで、新たな視点で会社を捉えるようになったと感じております。

冒頭にも述べました通り、私は周囲よりも9年遅い社会人生活をスタート致しました。当然経験も同年代よりはるかに劣るわけですから、死に物狂いで知識を吸収していかなければなりません。ありがたいことに、入社当初より経理部や営業管理部といった会社の経営における必須分野に携わる機会を頂いております。この機会を決して無駄にはせず、30代の新入社員でも会社に今後大きく貢献することが出来るよう日々学び続けていこうと思います。

最後になりましたが、今回このような機会を与え



2013年3月クラス会(卒業式前) 於:天神BUZZ
中央下段の帽子を被っているのが筆者

てくださった磯谷先生ならびに関係者の方々にお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

人物往来～退官

九州大学の思い出



経済学部研究院教授

佐伯 親良氏

[専門分野]計量経済学

九州大学を退任するにあたり、比較的自由に行動させていただいたことに感謝しています。私

が一橋大学大学院経済学研究科から初めて赴任したのは、佐賀大学経済学部管科学科でした。佐賀大学には海外研修を含めて7年間お世話になりましたが、(故)古賀誠先生をはじめとして諸先生方には大変お世話になりました。最後のゼミ生とは島根まで研修に出かけたことを鮮明に覚えています。

1986年に九州大学に赴任した時には、経済工学科計量経済学講座に所属しました。1980年代の中頃は、経済工学科は整備途上であり、教員の数も多いというわけではありませんでした。当初担当した科目は「経済計画」でしたが、(故)山崎良也先生の退官に伴い「計量経済学」を担当することとなりました。計量経済学は学部から一貫して研鑽してきた領域であり、計量経済モデル分析、景気変動指標

の分析、また、所得分布の統計的分布関数の推定、尺度の研究などに焦点をあてて研究することができました。1980年代からPCの計算能力、Diskの容量も徐々に向上し、計量経済モデルの構築、シミュレーション分析を進めるハード的な制約が徐々に低くなってきました。ただし、個人的に裁量可能な予算部分は当時はほとんどない状況だったこと、PCの価格は現在に比べて高かったこと、エコノメトリックスのツールは高価であったことなど、制約がなくなったわけではありませんでした。現在でも、分析ツールは学生が容易に買えるほどに安くなっていますが、フリーなツールもいくつか開発されている点で、分析面でのハードルは低くなってきていると言えます。

振り返れば1970年代と1980年代では極めて大きな転換があったように思われます。実証分析を試みた誰もが経験したことは、大型計算機センターにバッチジョブを依頼していた時代からある程度対話形式でプログラムの開発、シミュレーションモデルの構築ができる時代が到来したと意識したことではないかと思います。このような時期に手がけたのは中・短期的な日本経済のシミュレーションモデル、福岡交流圏のシミュレーションモデルでした。計量経済モデルをはじめとして、実証分析を進める上では、

経済データの整備が極めて重要であることは言うまでもありません。データのサーチから、作成、加工、整合性のチェックまでの地道な作業が要求されるのは高度な分析ツールが開発されてきた現在でも変わりありません。「Lucus批判」以来、計量経済モデルの構築は一部を除いてほとんどなされなくなってきました。PCの能力が向上し、計量経済分析用の高度なツールが開発されてきていることを考えると皮肉なことのようにも思えます。最近では、Big Dataの利用が話題になっています。膨大なデータから如何に情報を取り出し、法則を導出するか、あるいは、仮説の検証を行うかは極めて重要であると思われませんが、同時に計量経済学、統計学の分析方法を習得するとともに、Measurement Without Theoryではなく、理論的な側面を考慮することも

重要ではないかと感じているところです。

29年間の九州大学経済学研究院での生活は、学部、大学院での授業、演習を通じて多くの学生に接することができ、多様な体験をした年月でもありました。大学院生にかき回された時期がないではありませんでしたが、概ね留学生を含めて対応できた年月であったと振り返ることができます。2013年にはNigeriaの経済学会にも出席することができ、アフリカの文化、教育に僅かながらでも接することができ、米国やEUでの文化とは大いに異なる体験をすることができました。経済発展、成長、分配問題への取り組みは長年の課題ですが、今後とも海外からの留学生を柔軟に受け入れ、世界に貢献できる九州大学経済学研究院、経済学府の発展を祈りたいと思います。

お別れのことば



経済学研究院講師

中村 周史氏

[専門分野]マクロ経済分析

本年3月をもって退職いたしました。九州大学には3年間と短い間しかおりましたが、

方々で実に様々な得難い経験することが出来ました。特に、教育において、高い水準で教えることが出来ることを喜ぶ一方、それを学生に提供し、理解してもらうための努力の大変さを日々痛感しておりました。しかし、「このゼミは全く楽ではない」と説明会でも宣言してもなお、優秀な学生が多数集まってくれたことや、オフィスアワーの時間に毎週のように数時間に渡り、自分の復習ノートを片手に熱心に質問をする学生がいる環境で教育が出来たことは、大学教育に携わる人間にとっては大変な幸運で、代え難い経験であったと感じています。毎週朝早い時間にもかかわらず勉強会を希望し、参加してくれた学生たちに出会えたことも本当に嬉しい出来事でした。こうした向学心を持つ優秀な学生とのやり取りは、私自身の成長に大きく貢献してくれました。

また、様々な場面において多くの先生方と関わることが出来たことも、本当に幸運でした。私と同じ専門ではない色々な分野の先生方と親しく意見交換

をするという機会はこれまで多くなかったため、たくさんの新しい視点・アイデアを得ることが出来ました。実際、それまであまり興味がなかったテーマについても関心を持って掘り下げていくようになり、金融政策の理論研究に偏っていた以前に比べ、研究の幅が大きく変わりました。それ故、また自身の無知と戦うことになりましたが、若いうちにそれに気が付くことが出来たのは、研究者としての後の私を変えてくれるものと確信し、向き合っております。

このように日々研究や教育、学務と、忙しく過ごす中で、私の唯一の楽しみはラジオでした。私は元々高校まで山口県下関で育ち、福岡へ出かけることは良くありましたので、こちらでの日々はふと懐かしさを感じさせるものが多くありました。中でも、通勤で聴くFMラジオは私が高校まで勉強しながら夜に聞いていた局であり、昔と変わらないラジオパーソナリティの声は本当に懐かしく、自分がこちらへ戻ってきたことを最も強く感じさせてくれるものでした。そのため、日々の生活で朝と夜の通勤の少しの間、このラジオを聴いている時にだけ、他のことは全て忘れ、平穏を得ることが出来ました。異動先ではこの楽しみはなくなってしまうと思うと、少し寂しい気がいたします。

新しい勤め先でも、九州大学で得た経験を活かし、研究・教育の両面において精進できればと考えております。短い間ではありましたが、本当にありがとうございました。九州大学経済学部、大学院経済学府、及び同窓会会員の皆様の益々の発展を心より祈念しております。

経済学部同窓会会則

(名称)

第1条 本会は九州大学経済学部同窓会と称する。

(目的)

第2条 本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 講演会、懇親会の開催
- (2) 卒業生名簿の発行
- (3) 会報の発行
- (4) その他本会の目的を達成するために必要な事業

(本部並びに支部等)

第4条 本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6-19-1）に置く。

本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。

(構成)

第5条 本会は次の者を以って構成する。

- (1) 九州帝国大学法文学部経済科卒業生
- (2) 九州大学経済学部卒業生
- (3) 九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
- (4) 九州大学経済学部および大学院経済学府在校生
- (5) 九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
- (6) 上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者

(役員)

第6条 本会は次の役員を置く。

理事25名以内、評議員各卒業年度最低1名、監事2名、顧問若干名

- 2 理事のうちから会長を1人、副会長を若干名選任する。
- 3 役員の内任期は3年とする。ただし、重任を妨げない。
- 4 (1) 会長は本会を代表し、会務を総理する。
- (2) 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
- (3) 理事については別に規定する。
- (4) 評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。
- (5) 監事は本会の会計を監査する。
- (6) 顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお、会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。

(理事ならびに理事会)

第7条 理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

2 会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。

3 理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

(総会)

第8条 本会は毎年1回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めるときは、臨時総会を開くことができる。

2 通常総会では次の事項を承認する。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 役員を選任、会則の制定および変更に関する事項
- (3) その他本会の運営に関する事項

3 総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

(運営)

第9条 本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

(会計年度)

第10条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(個人情報の保護)

第11条 本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守する。

2 本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとする。

※会費規定

1. 会費は1人年額1,500円とする。
2. 会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
3. 必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
4. 会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）に区分する。

終身会費は一括払いまたは3分割または6分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は3年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。

なお、第5条の(4)について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②	3分割	15,000円×3回（15年間で納入完了）
③	6分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	3年毎に	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

附 則

本会則は、平成8年10月11日に改定され、同日より施行する。

本会則は、平成18年2月10日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏 (昭和50年10月4日～)(3期8年)
- 第2代 森下 弘氏 (昭和58年2月4日～)(1期3年)
- 第3代 岡野 正實氏 (昭和61年10月24日～)(2期6年)
- 第4代 谷川 大介氏 (平成4年10月9日～)(1期1年)
- 第5代 渡邊 彦士氏 (平成5年7月7日～)(1期3年)
- 第6代 福岡 道生氏 (平成8年10月11日～)(1期3年)
- 第7代 吉田 清治氏 (平成12年2月10日～)(1期2年)
- 第8代 森山 靖章氏 (平成14年5月31日～)(1期3年)
- 第9代 平山 良明氏 (平成17年7月7日～)(1期3年)
- 第10代 池田 弘一氏 (平成20年7月7日～)(2期6年)
- 第11代 貫 正義氏 (平成26年7月7日～)

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費(45,000円)と普通会費(3年間分4,500円)になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

- | | | |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 〃 | 3分割 15,000円×3回(1.5年間で納入完了) |
| ③ | 〃 | 6分割 7,500円×6回(3年間で納入完了) |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ(11回・49,500円の納入で完了) |

◎平成18年(2006年)3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、平成27年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更がありましたら、同窓会事務局までお知らせ下さい。

複数の同窓会関係者が写されている写真類を掲載したいと考えております。

適当なものがございましたら事務局までご連絡下さい。